東洋學藝雜誌第五卷七十八號
明治二十一年三月二十五日發兌

○謹で我邦の貴紳諸君に質す

加藤弘之

貴紳諸君は實に日本開明進歩の先導者でこざりて赫々たる功勲のあると云ふをは今更小生の申迄もなき程の次第であれど今日の幼童少年は決して貴紳諸君の大恩を忘却致してはならぬをと考へます貴紳諸君か我同胞三千七百餘萬人の先導者となりて西洋の文明を採るをに尽力勉勵せられたればこそ纔に廿余年の歳月よして今日の文明を見るに至りたをであります此僅々二十余年の間に日本が長足の進歩を致したをは決して世界萬國に例のなきをで西洋人をして實に仰天せしめたをであります二十年前迄は西洋人とさへ申せば夷狄禽獸抔と唱へて敢て之と齒するを耻ぬものは殆と千人中一人もなき程の有樣でありたものが此僅々の歳月間に今度は大反動が參りて西洋人とさへ云へば殆ど鬼神でもある歟の樣に思ふをとなりまし

た形体上のをから心神上のをに至る迄凡そ萬般の事西洋人を摸擬せざれば人間では無いと申す程の思想になりました日本婦人か鐵醬を付けるは野蠻なれども耳環をはめるは開化である帶をしめるは野蠻なれどもコルセットで腹をくゝるは開化である雪隱に參りて手を洗ふは未開なり洗はぬ方が文明である抔と申す樣に善にも惡にも一として西洋の摸擬ならざるは無き有樣となりました

併しヶ樣なる大反動は獨り小生のみならず貴紳諸君も決して好ましきをと思はれぬは辨を俟たぬをではあれども併し彼の上の好む所下是れより甚たしきものありと申す確言の如く貴紳の好まるゝ事は少年無智のものに至りては更に甚しきに至るでありますから夫れ故小生は先達て學士會院に於て我日本人か余りに西洋好になりて一にも西洋二にも西洋、西洋でなければ夜も晝も明けぬと云ふ程にあるのは彼支那人の何でも角でも西洋のをは嫌であると云ふ氣性とは丸で反對では有りながら其弊害は矢張同樣であらうと申す愚見を演説致したをであります

左樣なる道理故小生は諸君の尽力勉勵に由て日本が僅々

二拾余年の間に斯くぢかり長足の進歩を致したを祝して諸君に謝すると同時に又少年無智の輩か諸君の旨意のある所を誤認致して遂に過激なる進歩をなす樣なるをとなりたを歎ずることであります

然るに茲に甚た不思議千萬なるをが唯一つありて此不思議に付ては小生は種々に思考を費しましたなれども何分にも其不思議を解するをが出來ません故據なく諸君に質さんと欲するをでありますが何卒諸君は小生の爲めに此一大不思議を説明せらるゝ樣に希望致します

偖其唯一つの大不思議と申すは他のをでもありません即ち婦人に關しての諸君の品行であります甚た失禮なる申方の樣なれども小生の考では諸君は右申す如く西洋文明の先導者として我國の大功臣たるにも拘はらず婦人に關しての品行よ付ては全く西洋を模擬せられぬ樣よ見ぬますが（尤も諸君の中にも左樣で無い方々も隨分あるを故其分は除く）此道理は如何のをでありませう歟今更申す迄もなきをながら西洋では一夫一妻の良風俗ありて男子にして妾抔を持つをは決して出來ません併し稀れには内々にて外妾を持つ人抔もあるなれども左樣なる人は貴紳として社會の尊敬と信用を受くるをは出來難いでありますす其樣なる有樣である故に夫婦の間は互よ相敬愛する樣になりて居て決して夫か妻を奴隷視する樣なるをは出來ませんでありますす然るに我邦貴紳諸君の有樣を見れば正妻の外に妾を持つのみならず或ぱ内妾外妾を兼有するあり或は更に妓を聘して之れと眠る抔のをも甚た珍しからず實に我邦開明の先導者たる諸君の品行とは云へぬ醜行が決して少なからぬをでありますす開明の先導者たる諸君にして此の如き醜行あらんとは實に不思議千萬と考へます諸君は何故よ此をばかりは西洋を摸擬せられぬであるる歟何分にも小生には其理由を解するをが出來ません然るに諸君ハ此の如き醜行をも恥かぢらるゝ樣子のなきのみならず却て洒落のをとなして公然自負せらるゝ樣なる次第である故に彼少年無智の輩は此醜行に付ても共に諸君を學ぶをとなりて日本社會は男女間の品行に付ては實に言ふべからざる國辱を西洋人に晒すをであると小生は考へるでありますが併し如何でありませう歟

諸君は右樣なる有樣を何と考へられます歟醜行でない美行であると思はれます歟國辱でハない國光であると致されます歟小生には何分にも諸君の心中を推察するをが出來ません諸君か日夜刻苦勉勵して輸入せられたる西洋の文明と右の醜行とは兩立するものでありませふ歟諸君には夫れは兩立せぬものであるとハ心付かれませぬ歟若し諸君にして右等の邊に心付かれたるならば何故に左樣なる醜行は止められませぬ歟願くは諸君の考へらるゝ所を承知致したいをと思ひます

然るよ小生か竊よ諸君の內心を探りて見れは唯々情慾の熾盛なるが爲めに惡いをとは知りながら何分斷然と之を改むるをが出來ぬと云ふ丈けのをであらうと考へますが併し小生は右樣なる理屈も下等人民の口から出るならば甘じて許しますなれども諸君には決して許すをは出來ません去りながら小生は利己主義の道德說を信じまする故に諸君に向て只管利己心を棄てゝ右樣の醜行を止め玉へとは決して申しません諸君の醜行は却て利己心に害があるから止めらるゝ方が宜しからうと思ふのであります諸君が今日斷然右樣の醜行を止めらるれハ却て夫れよ由て大に利己心を充たすをが出來るであります

其理由如何と尋ぬるに付ては先づ茲に吾人々類と禽獸との利己心の異なる所より說き起さねばなりませぬが凡禽獸には唯々下等の欲卽ち動物的の欲のみが有ます動物的の欲と申すは云ふ迄もなく生命の欲、飮食の欲、男女の欲、自由の欲、安逸の欲等でありますが然るに吾人々類に至りては決して右等の欲のみでありません勿論人類も矢張動物である故此動物的の欲は同樣最も盛なるものではありますなれども併し夫れよりも更に高尙なる欲が人類には出來て參りました之を人類的の欲と稱しまするをで卽ち健康乃欲、富貴の欲、名譽の欲、威望の欲、道德の欲、知識の欲抔と申す類のものでありますハ人類にケ樣なる高尙の欲の備はりて參りたのが卽ち動物と異なる所以の重もなるものであります

吾人々類にありては右の動物的の欲も又人類的の欲も共に必用欠くべからざる欲であるをハ中す迄も有ません人類的の欲の甚た必用であると同樣に動物的の欲も亦必用

なる者でありますが然る所が此兩欲が時として矛盾するを
か出來ます例へば動物的の欲なる飲食の欲は生存の大本
で最も必用なるものではあれども恣に飲食すれば人類的
の欲なる健康の欲に害があります即ち茲が矛盾する所で
ありますそこで左樣な時は何れを取ればよろしき歟と申
すに人類は無論人類的の健康の欲を取りて動物的の飲食
の欲を制せねばなりません動物は知識が無い故健康と申
すをを知りません夫れ故に飲食を恣にして健康を害しま
するなれども人類は知識がある故うれではなりません
偖前申す如く貴紳諸君は只管男女の欲を恣まゝせらるゝを
なれども此動物的の欲ゝ人類的の名譽の欲と兩立が出來
ずして大に矛盾するものであると云ふの理を茲に聊か辨
じやうと思ひます尤も諸君が妾を置たり藝妓を買ふたり
して淫樂に耽けらるゝをも西洋各國との交際のなき時節
ならば左迄心配もなきをなれども今日外國交際の開けた
上に於ては實に國辱になるをと思はれます一方には男女
間の品行正しき西洋人を賓客と致しながら主人は無禮に
も數妾數妓を抱て淫樂を恣にするとは余りに不面目の次
第ではありません歟西洋人は之を日本の名譽として賞歎
するでありませう歟又は不名譽として蔑視するでありま
せう歟勿論一言せずして辨し得らるへきをと思はれます
何と貴紳諸君ゝヶ樣なる品行を醜行とは考へられませぬ
歟獸行とは思はれませぬ歟小生の考には西洋人は日本の
貴紳も知識は相應に開けたれども男女間の品行に至りて
は實に見聞するに忍びざる野蠻人であると考て居るであ
らうと思ひます貴紳諸君はヶ樣なる惡評を受けても猶自
己の名譽を害せらるゝをとは氣附かれません歟殘念なる
をであるとは思はれませぬ歟
以上の道理を以て考て見れゝ諸君は動物的の欲を充さん
が爲めゝ人類的の欲を犧牲に致されたものと評せねばな
らぬで有ます茲が即ち小生が先刻も申した如く小生ゝ諸
君に忠告するに決して利己心を棄てゝ品行を正しくし玉
へとは申さず却て諸君の不品行は利己の爲めに害になる
から止め玉へと申した所以でありますが諸君が不品行の爲
めに西洋の貴紳に笑はるれば痛く名譽を害せらるゝをに
て即ち諸君の名譽の欲が立たぬをとなるでこざる故取り

も直さず諸君は動物的の男女の欲の爲めに人類的の名譽の欲を棄てらるゝものであると評するより外に何分致し方か無いであります夫れ故に小生は諸君に利己の爲めに品行を正しくし玉へと忠告するでありまず決して利己を棄てて君子になり玉へとは勸めません

加之諸君の不品行ハ啻に諸君の名譽を汚すが如き小害に止まらすして更に大害の種子となりて居ります拾數年前より我政府は條約改正のをに一方ならず骨を折られるをでありますなれども夫れにも拘ハらす今日に至る迄成効を見るをが出來ぬでありますが是れは西洋人が日本の弱みに付けこみ何ぢやの彼ぢやのと不理屈を立て通さんと・するのが大源因となりて居る故ぢやとの説もありますが成程左樣なる道理も幾分か有りませうなれども併し小生の考では此をに付ては貴紳諸君の不品行も與かりて大に力あるものと存じます日本の心髓とも云ふべき貴紳諸君の品行が野蠻人同樣であるからは西洋人か日本人を以て己れと對等の上等人類と考ふるをは到底出來難いをと思はれます併し日本に參りた西洋人又は參らずとも粗日本の事情に通じた西洋人は日本人の品行は兎も角も知識の頗る上進したをは十分に知りて居るを故不品行の人種ながらも決して輕侮の出來ぬ人種であると云ふをは承知して居るなれども其他の西洋人に至りては日本人は智德共に猶頗る下等なる人種と思ふて居るに相違ないでありまず其下等なる人種と對等の條約を致さう抔とハ人情に於て考の出づべき筈がないでありますゝりて日本の事情に通じた西洋人か或は日本の爲めに辨じて日本人は德義に於ては猶甚た不十分なる所があれども知識は頗る上等の人種である抔と言ふて見た所が日本人には德義に不十分なる所がある殊に數妾數妓と淫樂を極むるをを耻ともせぬ人種である抔と聞た以上は縱令ひ知識が如何程に進歩したればとて左樣ふる人種と人間並の交際は決して出來ぬをであると駁擊をするは當然のをと思ハれます其樣なる譯故に諸君の不品行は我政府の折角の骨折を大に害する所爲であると考へます、此日本國ハ諸君等の集合で出來て居る所の國ではありません歟即ち我々の國ではありません歟然るに諸君の不品行の爲めに條約改正が

延滯して容易に出來ず爲めに國權は振はず國威は立たずして西洋各國と共に眞の獨立權を持つことが出來ぬと云ふは實に日本國の不名譽ではありません歟日本國の不名譽は取りも直さず諸君の不名譽ではありません歟小生は決して諸君に向て無理を申ずではありません唯々諸君が利己の爲めに男女の欲を制して名譽の欲を遂げらるゝ樣に致したいものと考へますなれども併し此愚見か大に誤りて居るやも計られぬでありますから、うこで諸君に質さんと欲するでありますが度々申す如く小生は何分にも諸君の不品行は我日本の獨立權にも係る程の重大事と考ふるをでありますから何卒諸君の高論をも承りたきをと存じまに

○國會議事堂の話

明治二十年十一月十九日大學通俗講談會に於て

辰野金吾講演

諸君よ只今幹事菊池君の述べられた通り私の今晩の講話の題は國會議事堂でありますが併し國會議事堂と申しましても國會議事院の全躰のことをお話しするのではなく單にアッセンブレーホールといふことだけをお話しするのでありますそれは皆さんも御承知でありませうが國會議事院の中で何れの部分が主眼であるかと言へばアッセンブレーホール即ち議事堂でありますが尤も議事堂の外に書房とか常議員扣所とか或ひは休憩所とかいふやうな種々の必要なる部屋がありますがこれは造家學上から考へてもまた議事院全躰から考へても議事堂と比較してみればさまで腦髓を費して熟考せねばならぬといふものでありませぬ故これは省きます又上院と下院と兩つながらお話しをやうと思ひましたがこれは同一なる事をくり返すやうになりますし又圖面が間に合ひませぬでありましたから今晩は下院の議事堂ばかりにゐたします

さて議事堂の話しを致しますには美術的と工學的との二通りありまそその美術的は体裁に關すること即ち眞のアートに屬する部分で所謂る建物の高さの割合とか窓の釣合とか又は裝飾に屬する色の配合等は一切この美術的に關するものでこれは如何なる數學家或は理學家も算出し得るとは出來ない一種特別なもので有ます又工學的は

物質乃強弱或ひは構造法或ひは間取の工合または通風即ちベンチレーション又は暖房ウヲーミングの類にてこれ等はみなこの工學的に屬するものです今晩い重もまこの工學的の三つの要点に關して話し致しますこれから本題に入りましようこれ迄は今晩講話致そに就ての前斷りでありますさて議事堂の構造に就て必要の点と申すは第一議員が立つて堂々と一國の政事について意見を述べるときにその主意を明瞭に聽き取らしむることの出來るのが第一肝要で如何に構造が善を盡し美を極めてあつても音聲が聽衆に通はなければうれこう何の益にも立ちませぬ只議事堂といふ名斗です第二は堂の構造の不完全なるときは如何なる能辯家にても演說中大に疲勞を覺へますもので例へば通常二時間か三時間も演說し得るものも其時間前に早く弱るものですからその患のないやうにするのもまた必要で有ます第三には滿堂の人々即ち議員も傍聽人にも不快を覺へないやうにしなければなりませぬ例へば頭痛がしたり或ひは氣分がわろくなることがよくあるものですからこれ等の欠点のないやう注意がまに大切でありますす第四には滿堂の人をして極寒と雖ども餘り寒いといふことを覺へないやうに又暑中でもひどく暑いといふことを感じないやうにしなければなりませぬまづこれ等の箇條は一つとして欠くことが出來ないものであります若しこの一でも欠いた議事堂ならば完全なるものといふことは出來ませぬ今晩來會の諸君の中には他日國會の議員になりなさるれ方がありませうから私の今日申したことの果して虛であるかまたは實であるかれ分りになりませうと思ひますそれで又あとに戻りまして右申しました箇條を欠点のないやうに滿足させるには如何なる方法よるかと申すに先づ滿堂の人によく聽き取らせんとすれば堂内の容積とこれに入るべき人數とに自づから比例のあるもので餘り多く過ぐれを音聲これがために吸收されて聞へなくなりますものです又天井などに空穴がありますとこれに音聲が這入ります故回音が生じて自然に演說者も大聲を發しなければならぬ勢よなりまして終には精神に疲勞を覺へてきて前に申した結果を生ずるやうにな

ります又不快を生することは畢竟通風即ち空氣の流通が不充分なるからでありますれば例へば多人數集會するところでは自然各自吐き出すところの炭酸瓦斯と新鮮なる空氣との循環が閉塞して不潔の空氣が堂内に停滞してきますから頭痛がしたり或ひは氣分が惡くなることがあります

ペクレ氏の説によれば議員壹人の一分間に要する新鮮の空氣の量は凡そ拾二立方呎モーリン氏のは三十六立方呎又パーク氏のは五十五立方呎と申すことですそれで今これを平均しますれば壹人に付き一分時間に要する量は三十四立方呎の割合になりますそれでこの空氣流通の道をよくなすには人造的の法を設けなければなりませぬこの法は何れの國に於てもすべて暖房法と並び行はれて居ります次に寒暑を避けるやうにするのは暖房法を用ひます例へば夏は凄凉の空氣を注入して冬期は温氣を送込むのでありますかやうな法は一般に家屋を温める處の見火爐或ひは置暖爐等のものにては其功を奏する事は出來ませぬ故に通常蒸氣の仕掛に致します今其法の大畧を述べますれば二た通りあります其の一つのは温氣が議事堂の上に配置してある數多の鑄鐵格子を透して昇騰しそれが漸々屋根裏に出る仕掛でありますその床か下の溝道は縱横にして恰もトンネルの形狀をなして居りますこの入口に巨大なる團扇を据へ蒸氣力を以てこれを廻轉するときは外部から新鮮なる空氣を吸ひ込みますがその空氣が一旦温室に入りて暖められて床の上に昇り出る構造になりて居りますこの法は英國及ひ北米合衆國の議事堂に用ひて有ます今一つのは前に述べたる如く床の下に縱横のトンネルを構ひこの軌道の入口には前のと仝じく鐵製の團扇をそなへこれを蒸氣力によつて廻轉するときは外部の空氣は吸入されて温室に這入り此際に適宜の温度を得て漸々昇騰して議事堂の蛇腹と天井の間隙より堂内に吐き出します又他の一方の出口にそなへたる鉄製の團扇を蒸氣力によつて廻轉するときは不潔なる堂内の空氣は自然床の上の鉄格子よりトンネルを通過して外部に吐き出す仕掛けになりてありますので堂内は寒中といへども適宜の温度を保ちたる純粹の空氣が流通して居ります又夏期は温氣の代りに冷凉なる空氣が冷室を經過して入り込む

やうになりて居りますこの法は獨り佛國下議院の議事堂に用ひてあつて他の國にはりの例をみませぬ併しこの兩法共に利害得失がありまして英國及び米國に用ひてあるものは空氣流通を能くする事には割合に吸收及び壓搾力を要せずして伊國のに比較いたしますると凡り三分一位にて充分なれども下部より上部に昇騰する自然法なるが故に不快なる臭氣を感ずるの欠点があります又佛國のは他のものに比べますと三倍の力を要する故にこれを充分にせんといたしますれば冗費の損がありますと云ことですドクトル、ビルリング氏の説によつてみますと英國や米國の議事堂に用ひたるものが先つ善いといふことでありますに要するにこの暖房と通風とは唇齒の如きものにて並び行なはれて參るもので決して區々になるものではありませぬ

右の通り大畧れ話しをたらば最前述べましたる欠くべからざる必要の箇條を滿足さする方法は諸君も大概れ分りなされたとおもひます尚ほ右必要の箇條を滿足さするには大よ堂の形狀に關係するものでありますから今この種類を擧げてその利害得失の要領を述べましやう議事堂の形を區別しますと是等の圖面に表はしたる如く長方形と半圓形の二樣でありますその一つの半圓形は古く希臘時代の演説堂に模して之れをつくりたるものにして音響學上より論じますると回音の患がなくて音聲が能く通りますこれが最上の形狀なりと近頃迄專門家の賛成を得たる者でありました又近世の例では今より凡り八十年前に改築したる佛國々會議事堂及十六年前改造せし伊太利亞の議事堂の類でありますその長方形は近世の形でありまして今を去ること凡り三十五年前英國が國會議事堂を造るにこの形を適用したるのがれほかた嚆矢（はじまり）でありましやう爾來北米の如き又は現今建築中に係る彼の獨乙帝國々會議事堂の如きはみなこの長方形でありますそれで考へまするに此兩樣の形狀即ち半圓形と長方形との利害得失如何に就ては近來一つの問題でありましやうと思ひます兎に角音響學上より論じますれば半圓形は二隅を除くの外は丸くありますゆゑ回音の患を減じ無益の空地とてもありませぬから長方形に比べますとたとへ優ることあるも劣る

處は有ませぬ然るに現今存在する半圓形のものは何れも宮殿を改造せしものでなければ在來の公館に增築したるものにして元と議事堂の計畫をして造りゐるものではありませぬ故に今日に至りては却て陳腐に屬して稱賛するには足りませぬ然るに彼の長方形の如きは英米獨佛伊五ヶ國の議事堂を圖面獨なり何れも最初から議事堂の計畫をしたるものですから先つ當時に於ては適宜の形狀なる者と思ひます就中彼の獨乙國のは最も新案です現今建築中でありまず此計畫は千八百七十二年に一度懸賞競爭をいたし尋で千八百八十二年今を距ること五年前に一層廣大なる規模の懸賞競爭ありましたが其時には我れも我れもと專門家は競ふて各々その意匠を提出いたしたることは實に夥多しき事でありましたがその中で優等なる意匠のものを精選したる時第一位を占めたる者ですから充分の出來と思れます此十人の中に第九番の位置を占めた人は諸君も御承知でありませう一昨年日本へ參りましたるビヨックマン及エンデーの兩人でありました此拾種の意匠を見るに全体の計畫は銘々違つて有ますが其主眼なる議事堂は十中の九種丈は長方形の形狀を適用してあります是を以て觀ますと獨乙國の建築學士社會の輿論はすべて半圓形狀のものは排斥したるものと思ひます以上は半圓形と長方形の區別を述べましたが是より英米獨佛伊五ヶ國の議事堂を圖面の上で說明いたしましやう

この第壹號の圖は世界に著名なる英國の議事堂の平面圖でありまず此惣坪は中庭の空地を除きますと凡り六千四百坪程の廣大美麗なる建物で御承知の通り彼のテームス河畔に巍々と高く雲表に聳へたるもの、圖でありまず其工は千八百四十年四月廿七日に起し十七年と云ふ永き時日を費やしてやうやく其工を竣へ其後千八百五十二年の國會を始めて此處に開きました其大工事なるは大概これで想ひやられましやう此の起工の前後より當りて英國人民のエキサイトメントなりしをは當時の記錄に附て見まするに中々今日我國に於て騷き立てる如きとは大に異なる所がありまず其譯は英國の如きは早く既に國會を起してありまして從前の議事堂が火災より罹りたるに付新築せんとするので有ますから建築學上のエキサイトメントが盛

なるに從て專門家の討議も頗るはげしく遂に此建物の內
遂に千八百五十年に至りて左右の翼增築の工を起すをに

なるに從て專門家の討議も頗るはげしく遂に此建物の內部に裝飾デコレーションを施すことその好機會なるを知り一つは英國美術の進歩を謀る目的にて美術協議委員を設立ずる等の美擧がありました此議事堂の大きさは長七拾五呎幅四拾五呎高四拾壹呎天井は袴越樣の形をなす此面積我九拾四坪弱（六尺四方壹坪）床の平面積を議員の數に比例いたしますれば議員壹人に付て大略拾平方呎又容積ハ四百二拾立方呎の割合で有ます堂の一方の中央に議長の席を設け其前面は書記官席左側は保守黨右ハ改進黨の席とし階上左右の回廊に貴顯の傍聽席を取り議長の席上の回廊は新聞記者の席とし其前面の回廊の前通りは外交官の席にて其後部は普通傍聽の席であります通風暖房のことは前に陳述したをば之れを畧します次に北米合衆國のを簡單にお話し致しませうこの議事院は今を距るを九十四年前に將軍ワシントンが自らその基礎を据ゑられし以降拾七年の星霜を經て竣工いたしたるに千八百十四年の兵火に罹り全部烏有に歸しましたが間もなく之を修築しましたれど是迄の議事堂では何分手狹なる事を感じて遂に千八百五十年に至りて左右の翼增築の工を起すことになり殆んど二十有餘年を經過して全く其工を竣たものであります此全躰の惣建坪は二千四百坪この內二百拾坪餘が下院の議事堂でありますその形狀は長方形にして長百十三呎幅六十七呎高卅六呎議員席は半月形に配置し階上の回廊は傍聽席といたしうこで堂の平面積を議員壹人ゑ平等してみますれば凡そ廿五平方呎其容積を平均しますれば九百卅立方呎の割合に當ります左れば議員壹人につき英國のゟ平面積も容積も大きくなりて居り升から通風の道は自然よくなる譯でありますが或人の試驗によりますと議員及傍聽人を合せて都合六百人程這入て居る時ゑ炭酸瓦斯の量をはかりましたら一萬分中漸く六或は七位であつたと申します是より獨乙のに移ります是は前に述べました通り最新案で當時漸く骨組の半分ほど工事が出來て居るそうですが只骨組と斗り申してはわかりになりますまい獨乙で建築致しまする際にハ最初は只骨躰カルカスの構造丈を記して積り立て、后に外部を他の上等なる品物にて化粧すると申す事であります此全体の惣坪は

三千五百坪ありまして此の内百八十七坪餘が議事堂であります其形狀はやはり長方形にて長九十二呎幅七十二呎高五十九呎ですこれを議員壹人に平均しますれば凡そ十七平方呎にて其容積千立方呎の割合であります議員席は北米の如く半月に配置して階上周圍の回廊を傍聽席としてあります其通風及び暖房法の如きは未だ明かに分りませぬからお話しが出來ませぬ以上は皆何れも長方形のもの、例についての説明であります

次に佛國下院のことをお話し致しませう此建物は今より二百年前ブルボン家の宮殿に建築したる者で其后民有より歸しアッセンブレーナショナルに用ひられその后復た下院として今日迄至りましたのであります右の如く舊き宮殿を段々改め造り或は增築致しました故形狀も他のものに比較すれば大に相違して居ります勿論地形も異りて居りますからであるまいこの惣建坪は凡三千坪で此の内凡そ百五十坪が議事堂であります此の形狀は半圓形にて此の直徑九拾九呎直線徑七拾呎高五拾六呎です之を議員壹人に平分しますれば其平面積拾平方尺又容積凡そ四百八拾六立方呎の割合であります議員席及び傍聽人席の如きは北米のものと殆んど相似よりて居ります

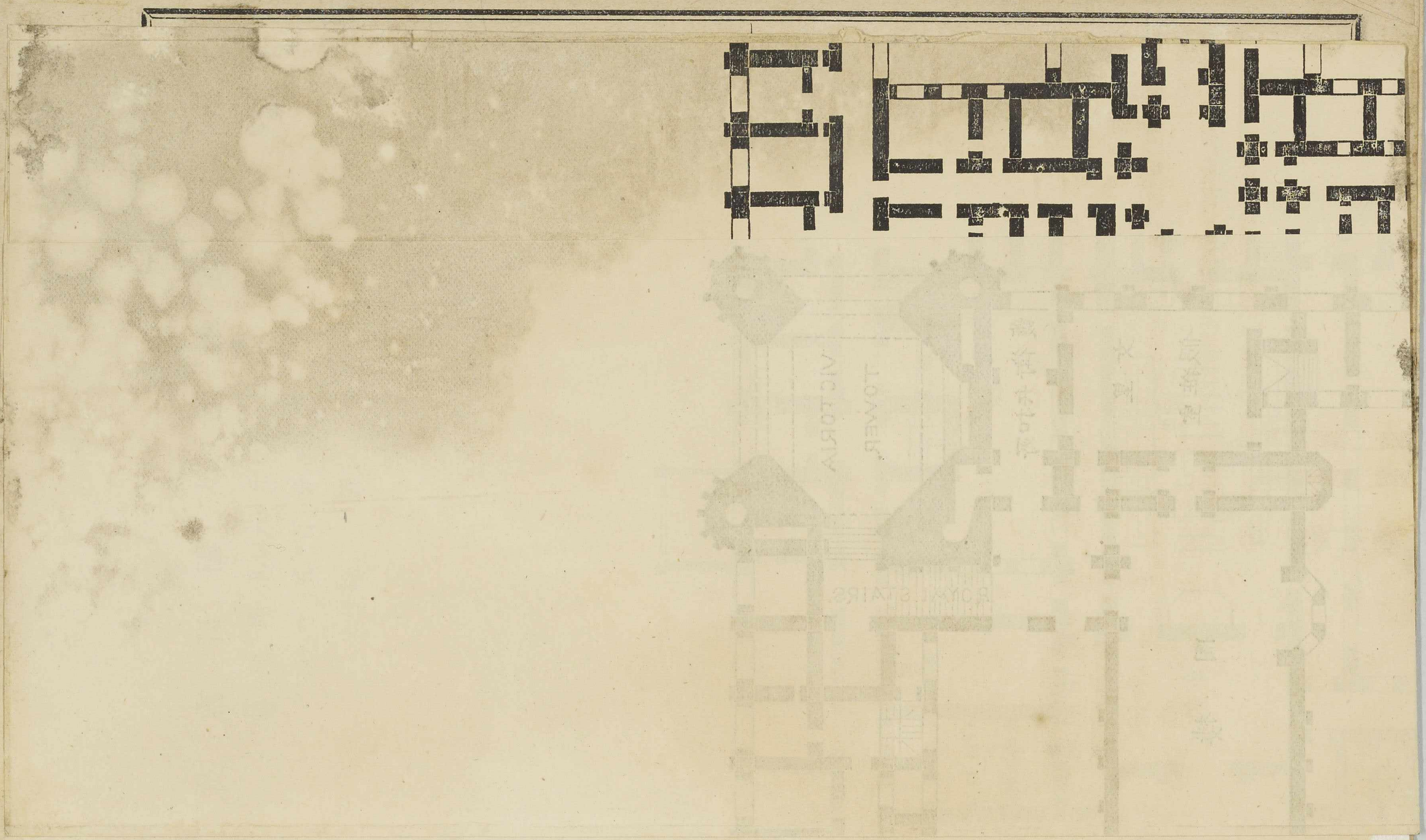
終りに少しく伊太利亞の下院の議事堂をお話し致ませう此全躰の圖面は持合せて居りませぬ故先年私が遊回中目擊して見取圖をしたるものと又筆記して置きたるもの又は記憶し居る丈を述べますのであります誠に不充分な事でございますさて此建物は元と驛遞局でありましたものを今より拾六年前に其中庭に屋根を置き改造して下院となしたので恰も佛國の下院の建物に於けると同樣であります議事堂の形狀及議員席且傍聽人席の配置に至りては誠に瓜二つと申しても宜き程に相似て居ります併し佛國のよりは其平面積及び容積共に稍々少なるかと思ひます議員壹人に付其平面積及び容積の割合等は他日取調べまして今夕の不充分なる處をは補うと思ひますこれ等は二國即ち佛と伊の半圓形の例であります

以上陳述致しました内伊國を除きて殘り四ヶ國の平面積及容積を今議員壹人に付て平均致しますと平面積は拾六平方呎又容積は七百〇七立方呎の割合に當ります

英吉利國々會議院

總建坪壹百四坪凡六千六百五十分之壹
現縮圖

壹人に平分しますれば其平面積拾平方尺又容積凡り四百平方呎又容積は七百〇七立方呎の割合に當ります

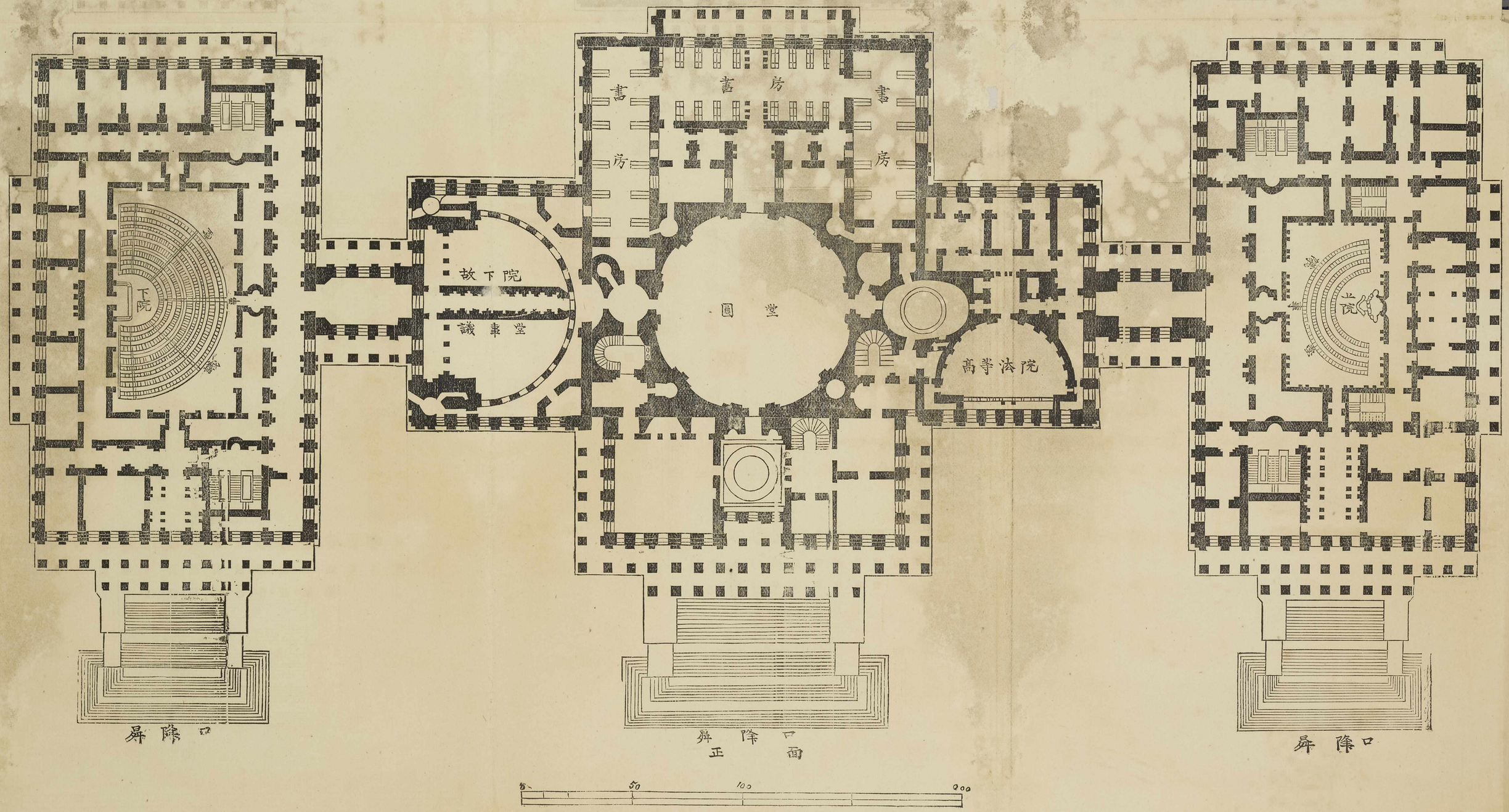

ROOM & STAIRS
VICTORIA
TOWER

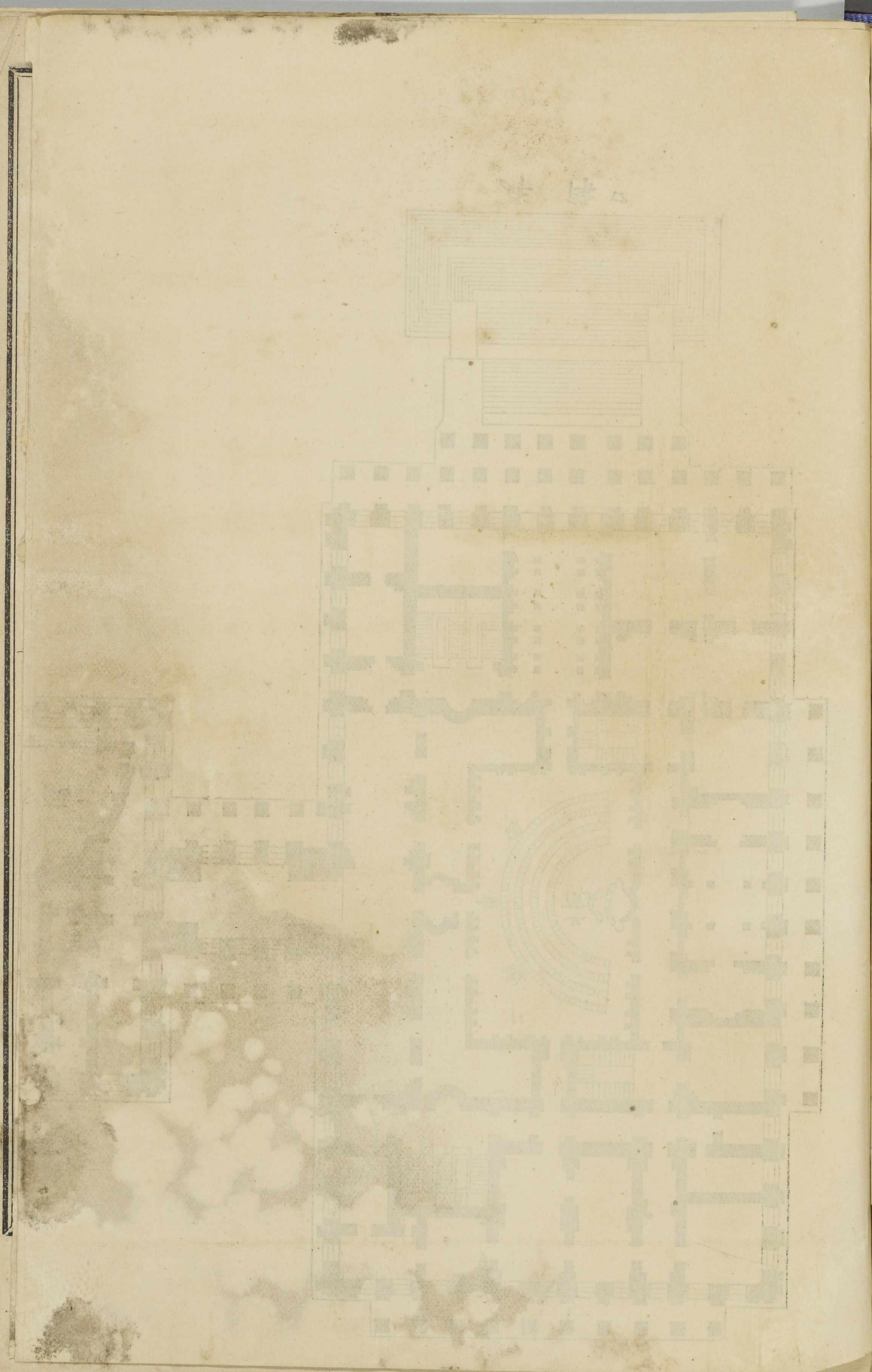
北米合衆國々會議院

總建坪凡貳千四百坪

現寸五百分之壹

縮圖





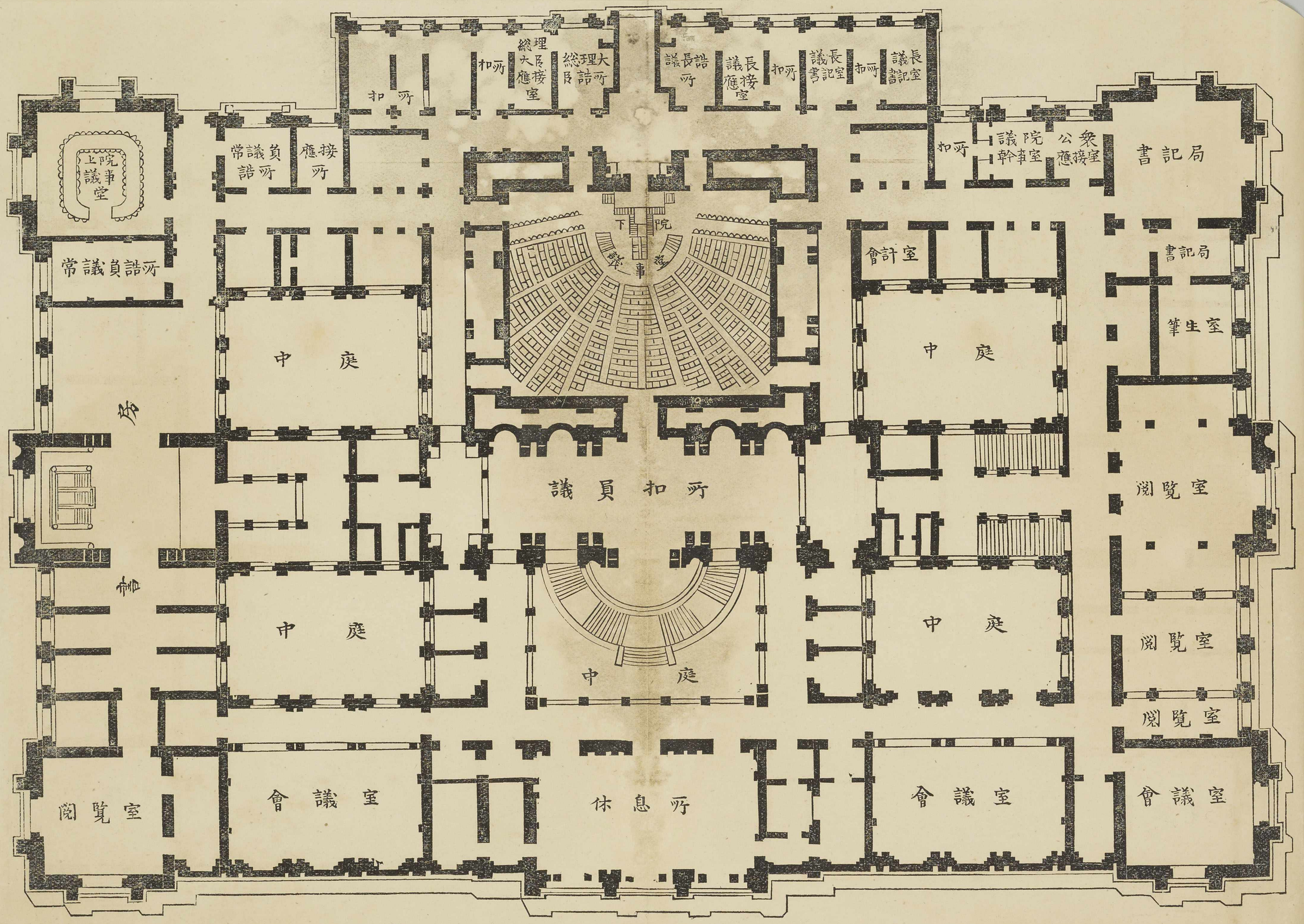
獨逸帝國議會院

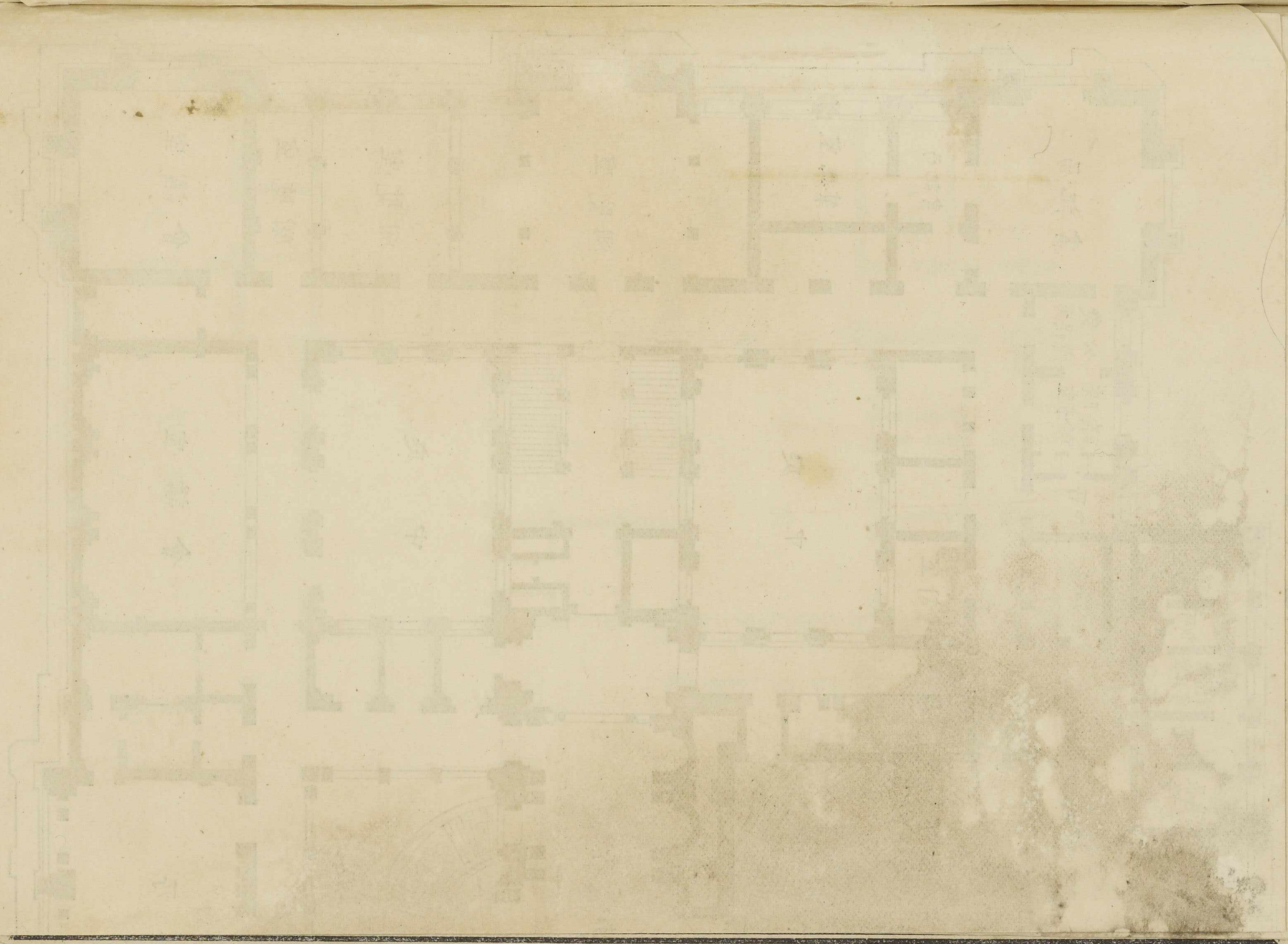
當時建築中

總建坪凡三千五百坪

現寸五百分之壹

縮圖





佛蘭西國々會議院

總建坪凡三千坪

現寸五百分之壹

縮圖

今總括して前陳の議事堂の要点を工學的より演述致しまして任せ申しますがそれは誠に容易なることゝは思はれませぬと申すは目下一個人が建築いたしまするに一坪百五十圓以上のを企てる人は萬人の中に幾人ありますか實に指を屈して數へるほどの有樣であります當時は眞に建築學士困苦の秋と思ひます如何となれば建築學士は上等の建物を計畫監督するには困りませぬが麁末の建物を續々頼まれるには實以て困却いたします有の譯ですから今日本で充分の者を建築することは極めて困難と申すことが知れませうされば假の建物を築造するゝ不經濟なり又永久のたてものは今日の有樣では人民の負擔には六つかしきことですから暫く新築するを見合せるより他に良策はありませぬ併しながらこゝに一つの折衷法が有ますそれは入費を節減してなる丈不經濟にならない結果をあらはすやうにすることで有ますそれは彼の永田町の參謀本部を假りに利用すること、として在來の建物を今少しく改造して事務所その他の用に供しその裏面に凡り三百坪程の上院下院(兩院あるものとして)の議事堂を長方形に增築

今總括して前陳の議事堂の要点を工學的より演述致しました事を申せば第一議員の演説の主意を判然と聽かしめる事の出來るのと第二疲勞を覺へないやうにするのと第三滿堂の人をして皆不快を感ぜざるやうにするのと第四寒署の度を著るしく感ぜしめないやうにするとの四ケ條にてこの四ケ條を滿足せんがため其形狀及び面積容積の割合に注意して成功したるものを始めて完全なる議事堂と稱することがいふでけますと申すこれ等の話であります

終りに臨み一言陳述いたしますそは目今上下一般熱心に注目するところの我國議事堂設立の一大學のことでありますす私の考にては一時まに合せの堂を建築するよりも寧ろ暫くこれを見合せて在來の建物を假りに使用し置き追て我國開明の度に適したるものを建築するに如かないと思いますそれは十四五年このかたの實驗上にても假りの建物程不經濟なるものはありませぬ諸君も日々御覽になります諸官省建物はその實例でありませうされば日本現時の有樣では堅牢美麗よして永久保つべき建物を建て得

いたしましたならば其の入費も高くつもりても廿萬圓には上らずして出來ませうとおもひます先づこれを日本の議事堂として諸官衙のたてものに比較しても位置といひ体裁といひ不釣合のものではないと思ひますこの考は私が三四年前に起したるものでありましたが近頃の新聞紙上によれば不日三千坪の國會議事堂を八萬圓の豫算で新築するとのことですから私の考も今は陳腐になりました併し假りの議事堂と申しましても前に申しました議事堂建築の要領は滿足したるものに相違ありますまいと考へます

今二三年の中にハ今晩來會諸君の中より國會議員となりて演臺に上り滔々と勇辯を掉はれる御方がありませうから議事堂の構造の良否ハ何れの点にあるかおのおの分りなさいませう又今より十數年も經過しましたら經濟主義か或いは不經濟主義の建物であるかよく知れる事でありませうまだ申述べたき事もありますが餘り長くなりますと諸君の欠伸を促しますから先づ今晩はこれぎりにいたします

○

予嘗テ支那古文學略史ノ著アリ頃ロ此編ヲ得テ之ヲ讀ムニ考證該博用意周到大ニ相發明スルニ足ルモノアリ乃チ請フテ之ヲ本誌ニ載セ以テ世ノ哲學ヲ愛スル諸氏ニ示ス顧フニ近時東洋ノ哲學ヲ研磨スルモノ漸ク世ニ出ヅ蓋シ亦文運進化ノ致ス所歟

末松謙澄識

支那古代哲學史一斑

瀧川龜太郎未定稿

道家

道家ハ老子ヲ祖トシ無爲恬憺天下ヲ治メ一身ヲ脩ムルヲ以テ旨トナス關尹子列子文子莊子ノ徒相繼キテ起リ之ヲ祖述セリ其後又流レテ道教ト云フ一種ノ宗教トナリテ佛教ト共ニ今猶支那全國ニ行ハル又楊朱及ヒ申不害韓非ノ徒モ亦之ヨリ一變シタルモノナリト云フ漢ノ初ニ當リテ其學盛ニ行ハレ君ハ文帝景帝ノ如キ宮闈ハ竇太后ノ如キ宗室ハ劉德ノ如キ將相ハ曹參陳平ノ如キ名臣ハ張良汲黯鄭當時班嗣直不疑ノ

如キ處士ハ蓋公鄧章王生黄子楊王孫安丘望之等ノ如其長壽ナリシヲ以テ時人之ヲ稱シテ老子トイヘリ

如キ處士ハ蓋公鄧章王生黃子楊王孫安丘望之等ノ如キハ皆之ヲ宗トセシガ武帝ノ時儒術ヲ以テ士ヲ採リシヨリ其學一タヒ衰ヘタリ其後魏晉ノ間ニ至リテ士大夫清談ヲ好ミ其學再ヒ興レリ今其由テ來ル所ヲ考フルニ東漢ノ末氣節ヲ尚ヒタルノ餘習ナランカ六朝ニ至リテ復衰ヘタリ（晉魏ノ間士大夫清談ヲ好ミ老莊ヲ尚ヒタルヿ高似孫カ子略趙翼ガ二十二史劄記等ニ詳カナレ𪜈文長キヲ以テ載セス）

老子

叙傳

老子ハ楚苦縣厲鄉曲仁里ノ人ナリ

姚姬傳莊子ニ孔子陽子共ニ沛ニ之テ老子ニ見エタル事ヲ載セタルヲ以テ老子ヲ以テ宋國沛人トナス（惜抱軒文集）

今按スルニ恐クハ非ナラム

姓ハ李名ハ耳字ハ聃

今本ノ史記ニ名耳字伯陽謚曰聃ニ作レ𪜈是レ後人ノ妄ニ改メタル所ニシテ史記ノ原文ニアラサルヿ姚姬傳（惜抱軒文集）詳ニ之ヲ辨セリ

其長壽ナリシヲ以テ時人之ヲ稱シテ老子トイヘリ

史記老子傳ニ云フ蓋老子百有六十歲或言二百餘歲ト或ハ道ヲ常樅ニ學ヒタリト云フト雖其果シテ然ルヤ否ヤヲ詳ニセス

淮南子繆稱訓ニ云フ老子學商容、（商容ト常樅ト音近ケレハ蓋シ同人ナルヘシ）見舌而知守柔矣、

說苑敬愼篇ニ云フ常樅有疾、老子往問焉、曰、先生疾甚矣、無遺教可以語諸弟子者乎、常樅曰、子雖不問、吾將語子、常樅曰、過故鄉而下車、子知之乎、老子曰、過故鄉而下車非謂其不忘故耶、常樅曰、嘻是已、常樅曰、過喬木而趨、子知之乎、老子曰過喬木而趨、非謂敬老耶、常樅曰、嘻是已、張其口而示老子曰、吾舌存乎、老子曰然、吾齒存乎、老子曰、亡、常樅曰、子知之乎、老子曰、夫舌之存也、豈非以其柔耶、齒之亡也、豈非以其剛耶、常樅曰、嘻是已、天下之事已盡矣、無以復語子哉（按スルニ稽康カ聖賢高士傳商容傳ニ此事ヲ載セタレ𪜈文稍簡）

周ノ守藏ノ史トナレリ居ルヿ之ヲ久フシテ周ノ衰ヘタルヲ見テ去リテ關ニ至レリ關ノ令尹喜カ曰ク子將ニ隱レン

トス強テ我カ爲メニ書ヲ著セト是ニ於テ老子迺チ書上下篇ヲ著シテ道德ノ意ヲ言フ〻五千餘言ニシテ去レリ今ノ道德經是ナリ其終ル所ヲ知ラス

朱得之カ曰ク世謂老子騎青牛出關不知所終、及考莊子之書、載老子死其友秦矢吊之、然則不知所終者、方外士、欲神其事而誣之也、(通義)ト洪亮吉モ亦曰ク老子西入于關、終于關中、水經注敞屋有大陵、世謂之老子陵、合之以莊子所云老聃死秦矢吊之文是老子死于秦也(更生文集)ト參存

按スルニ老子ハ春秋ノ末ヨリ戰國ノ初ニ亘リタル人ニテ孔子ヨリ稍後ナルヘシ故ニ孔子ノ之ニ禮ヲ問ヒシコトハ禮記史記

史記老子傳ニ云フ孔子適于周、問禮于老子、老子曰、子所言者、其人與骨皆已朽矣、獨其言在耳、且君子得其時則駕、不得其時、則蓬累而行、吾聞之、良賈深藏若虛、君子盛德、容貌若愚、去子之驕氣與多欲、態色與淫志、是皆無益於子之身、吾所以告子、若是而已、孔子去謂弟子曰、鳥吾知其能飛、魚吾知其能游、獸吾知其能走、走者可以爲罔、游者可以爲綸、飛者可以爲矰、至於龍、吾不能知其乘風雨而上天、吾今日見老子、其猶龍邪、ト

諸書ニ出テタレ𪜈固ヨリ虛妄ノ事ニシテ信ヲ措クニ足ラス此事韓退之カ原道矦雪崖カ異端辨正齋藤拙堂カ老子辨等ニ詳ニ之ヲ論セリ

按スルニ拙堂老子ヲ以テ孟子以後ノ人トナセリ然レ𪜈莊子ハ孟子ト同時ニシテ其書中老子ノ事ヲ載セタレハ其孟子以前ノ人ナリシ〻明カナリ

又按スルニ伊藤蘭嵎老聃ハ古實ニ其人アリタルニアラスシテ鴻蒙伯昏無人ト同ク莊子ノ寓言ニ出テタリトイヘト固ヨリ據トコロナキ說ニシテ信スヘカラス

書籍

今傳フル所ノ道德經上下篇ハ老子ノ自ラ著ス所ニシテ未タ後人ノ之ヲ疑ヒタルモノアリタルヲ聞カス然レ𪜈上篇君子居則貴左以下九十九字昔人其注文ノ攙入ナランコヲ疑ヒ又莊子天下篇ニ引キタリシ老聃ノ語今ノ老子ニナキ所アレハ其完書ニアラサル〻疑ナシ此書傳本河上公注分テ八十一章トナシ傳本嚴君平道德指歸論ハ七十二章ニ分

チ孔穎達ハ六十四章ニ分チ吳澄ハ六十八篇ニ分チ王弼司馬光焦竑諸人ハ之カ章數ヲ分タス今之ヲ讀ムニ首尾連續一貫シテ分ツヘカラス王馬諸人ノ如ク章ヲ分タサルヲ可トス但シ上下篇ニ分ツヿハ已ニ史記ニモ見エタレハ老子著書ノ時ヨリアリタルヿナルヘシ然レ𪜈唐ノ玄宗ノ如ク上篇ハ道ヲイヒ下篇ハ德ヲイフトスルハ非ナリ

此書ハ莊子列子ト同シク共ニ子ト稱セシカ漢初黃老ノ說盛ニ行ハレタルカ故ニ景帝ノ時改メテ經トナシ其道德ヲ說キタルヲ以テ名ケテ道德經トイヘリ（焦筆乘氏大意）

學統

老子ノ學ノ本ツキタル所ヲ論シタルモノ古來其說一ナラス莊子天下篇ニ以本爲精、以物爲粗、以有積爲不足、澹然獨與神明居、古之道術、有在於是者、關尹老聃聞其風而悅之云々トアレ𪜈唯古ニ其道アリテ老子之ヲ祖述シタリト云ヒタルノミニテ其何人ノ道ナリト明言セサレハ據ルニ足ラス佛人レミザ氏ハ外國ヨリ來リタルモノナラントイヒ（ラピット氏支那文明論）ラピット氏モ印度ヨリ來リタルモノナラント云ヒ（同上）佛書中ニモ亦老子ノ釋氏ニ學ヒタリト載セタレ𪜈並ニ明據ナキノ說ナレハ信スヘカラス班固ハ道家者流、出於史官、記成敗存亡禍福古今之道、然後知秉要執本、淸虛以自守、卑弱以自居云々トイヘ𪜈是レ老子ノ柱下ノ史トナリタリト云フヿヨリ附會シタル說ニメ亦信スヘカラス姚姬傳ハ孔子告曾子子夏述所聞老聃論禮之說、及老子書言以喪禮處戰之義、其於禮精審非信而好古能之乎、南行者久而不見冥山、求之過也、夫老聃之言禮、蓋所謂求之過者矣、方其好學深思、以求先王制禮之本意、得先王制禮之本意、而觀末世爲禮者循其迹而謬其意、苛其說而益其煩、假其名而悖其實、則不勝帽忿而惡之、禮云禮云玉帛云乎哉、老子之初志、亦如孔子、而用意之過、貶末世非禮之禮、其辭偏激而不平、則所謂君子駟不及舌與、トイヒ安井息軒ハ聃精于禮不能得明主以行其道、而世方趨澆薄、詳於末而略於本、守道之心、不能勝時救之念、遂遺其物、而專言其理、欲使人々喻至理於一言之下、以反之於上古之無爲故曰禮忠信之薄絕聖棄智、大道乃行云々トイヘリ是レ並ヒニ孔子ノ問禮ヒタリト云フヨリメ立テタル說ナレ𪜈前ニモ述ヘタリシ如ク孔子禮ヲ問ヒタリシヿハ信スヘカ

日、鳥吾知其能飛、魚吾知其能游、獸吾知其能走、走者可テ八十一章トナシ傳本嚴君平道德指歸論ハ七十二章ニ分

ラサレハ據ルニ足ラス晁說之曰ク伏羲文王周公贊易之後惟老氏得易之變通屈伸ト近頃物部徂徠宇佐美濬水廣瀨淡窓ノ諸氏モ亦老子易ヨリ出テタリトノ說アリ是レ亦明証ナキノ說ナリ又漢以來黃老並ヒ稱シ老子ヲ以テ黃帝ヨリ出テタリトイフノ說モ亦信ス故稱爲黃老之學戰國時列圉寇蒙莊之徒、著書、咸以黃老爲宗師圉冠天瑞篇引黃帝之言曰、谷神不死、是爲玄牝、玄牝之門、是爲天地根、綿々若存、用之不勤、此章黃帝之言、而存五千言之內則老子之所書、同出已明矣、（封氏聞見記）ト按スルニ黃帝ハ支那全國ヲ一統シタル天子ニシテ其聖睿ナリシコトハ史記ヲ讀ミテモ知ルヘケレ𪜈當時ハ纔ニ村長政治ヲ變シテ一統政治トナシ又創メテ文字ヲ作リタル𪜈ナレハ其智識ノ幼稚ナルハ言ヲ待タス而シテ此ノ如キ精微ノ言アルハ疑ハシ列子ノ所謂黃帝書ハ春秋戰國間ノ人ノ依托セシ所ナラン（按スルニ列子黃帝書ヲ引キタル所谷神不死ノ章ヲ除クノホカ猶多シ）況ンヤ列子ノ書魏晉ノ間ニ出テ後人ノ攙入多ク悉ク信スヘカラサルニ於テオヤ淸ノ徐大椿道德經注二卷ヲ著ハシ論シテ曰ク黃帝無爲ヲ以テ天下ヲ治メ老子之ニ法レリト四庫全書提要ニ之ヲ駁シテ曰ク黃帝以七十戰定天下一切禮樂刑政、無一非其所制作、古書具在、班々可考、必謂黃帝以無爲治天下、尤非黃帝實事ト其言誠ニ是ナリ以上ニ述ヘタル所ノ如クナレハ老子ノ黃帝ヨリ出テタリトイフノ說モ亦信スヘカラス然レ𪜈莊子ヲ始メトシテ諸書ニ老子ノ黃帝ヲ尙ヒタルコトヲ載セタルハ眞ニ老子ノ其學ヲ祖述シタルニアラスシテ之ヲ假リテ以テ重キヲ取リ其說ヲシテ世ニ行ハレシメンカ爲メニノ猶墨子ノ禹ヲ稱シ醫家農家ノ神農黃帝ヲ稱シ楊朱ノ伯成子高ヲ稱シタルノ類ノミ然ラハ老子ノ學ハ何ニ本キタルヤト云フニ盖シ老子周ノ史官トナリテ徧ク古來ノ典籍ヲ研究シ兼テ當時ノ世態ト人情トヲ觀察シ沈思熟考天理ト人道ニツキテ大ニ悟ル所アリテ一派ノ學說ヲナセシナラン抑老子ノ時ハ支那文明ノ程度ナホ下ク一般人民ノ智識未タ進マス古來聖賢ノ言論セシ所ナキニアラスト雖其精細微渺老子ノ說ノ如キモノアルナシ而シテ老子此時ニアリテ此說ヲ立テシハ盖シ幾多ノ困難ヲ經幾多ノ思慮ヲ費セシナラム然レ𪜈是レ余カ臆想ノ說ニシテ其果シテ然ルヤ否ヤヲ保スル能ハス暫ク書シ

テ大家ノ是正ヲ待ツ

老子ノ學流レテ列圉寇莊周トナリ楊朱トナリ申不害韓非トナリタルヿ前ニ述ヘタルカ如シ其列トナリ莊トナリ楊トナリタリタルハ理ノ當ニ然ルヘキ所ナレ𪜈其恬澹虛無ノ旨ト全ク相反シタル刑名慘刻ノ申韓トナリタルハ實ニ怪ムヘシ蘇東坡ハ之ヲ論シテ老聃莊周論君臣父子之間、

汎々乎若萍游於江湖而適相値也、夫是以父不足愛、而君不足忌、不忌其君、不愛其父、則仁不足以懷、義不足以勸、禮樂不足以化、此四者皆不足用、而欲置天下於無有、夫無有豈誠足以治天下哉、商鞅韓非、求爲其說而不得、得其所以輕天下、而齊萬物之術、是以敢爲殘忍而無疑（東坡集）トイヒ

俞曲園ハ老莊之學、一死生、齊物我舉天下之大、而歸之空虛、充其意君臣父子之名、可以不立、禮樂刑政可以不設、善可以無賞、惡可以無罰、天下之治亂、可以不知、相與以無事爲安而已矣、嗟後世之天下能遂如大庭庸成之世乎不能也、有國家者、不幸而用其說、法蔽而不知修、事廢而不知舉、天下靡然不可爲矣、老莊之說、用於天下、則所以感之者、豈得其宜乎哉、智久不用、人有餘智、勇久不用、人有餘勇、鬱之也深、畜之也固、其發之也愈烈、而申韓之徒、出於其間矣（春在堂全集）トイヘトモ並ニ信シ難シ今按スルニ老子曰ク

天地不仁、以萬物爲芻狗、聖人不仁、以百姓爲芻狗、將欲喩之必固帳之、將欲張之、必固强之、將欲廢之、必固與之、將欲奪之、必固與之、

國之利器、不可以示人、

古之善爲道者、非以明民、將以愚之、

欲上人者必以言下之、欲先人者、必以身後之、

棄智棄聖、民利百倍、

トコレ等ノ言ニヨレハ老子ノ意ハ全ク權謀術數ヲ以テ天下ヲ愚ニシテ之ヲ治ムルニアリ其一變シテ申韓トナリタルハ怪ムニ足ラサルナリ

立說

老子ノ探究シタル學理ハ前ニモ述ヘタリシ如ク二個ノ區別アルモノ、如シ一ハ天理（一切萬有ノ本原即道）二ハ人道（人類ノ經過スヘキ道路）是レナリ而シテ人道分ツテ治國脩身ノ二トナス然𪜈其所謂人道ハ則チ天理ニ法ルニ

アリテ天理ヲ離レテ截然別ニ人道アルニアラサルナリ」

老子ノ學理ハ大略右ニ敍シタル所ノ如クナレ𪜈今其書ヲ讀ムニ一章一節概シテ天理人道ノ二者ヲ混同セサルハナシ故余ハ讀者ヲシテ明了ナラシメンカ爲ニ各々章ヲ分ツテ之ヲ論述セムトス

先ツ天理即チ道ヨリ論述セムニ其言ニ曰ク

玄之又玄、衆妙之門、

道之爲物、惟恍惟惚、ニ兮恍兮、其中有象、恍兮惚兮、其中有物、窈兮冥兮、其中有精、其精甚眞、其中有信、視之不見、名曰夷、聽之不聞、名曰希、搏之不得、名曰微、此三者不可致詰、故混而爲一、其上不皦、其下不昧、繩々不可名、復歸於無物、是謂無狀之狀、無物之象、是謂恍惚、迎之不見其首、隨之不見其後、

吾不知誰之子、象帝之先、

有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立不改、周行而不殆、可以爲天下母、吾不知其名、字之曰道、强爲之名曰大、大曰逝、々曰遠、ニ曰反、

谷神不死、是謂玄牝、玄牝之門、是謂天地根、綿々若存、用之不勤、

道常無爲、而無不爲、

大道汎兮、其可左右、萬物恃之以生而不辭、功成不居、衣被萬物而不爲主、

道生一、一生二、二生三、三生萬物、

道生之畜之、長之育之、成之熟之、養之覆之、

譬道之在天下、由川谷之於江海也、

ト是等ノ言ニヨリテ之ヲ考フレハ老子ノ意蓋シ以爲天地未タ分レス萬物未タ生セサルノ前ニ方リ一種ノ靈妙不可思議ナル道(即天理)トイフモノアリテ其物タルヤ窈冥恍惚其形ノ見ルヘキナク其聲ノ聞クヘキナシト雖其中自ラ神力ヲ有シテ死物ニアラス天地ヲ始メトシテ宇宙間ニ存在スル萬物ヲ生成シ遂ニヨク之ヲ長育スルハ皆其作用ナリ而シテ其事ヲナスニ方リテヤ無爲ニシテ智巧ヲ用ヒストイヘトモ而シテ爲サヽル所ナク又萬物ヲ生成シ長育スルノ大功アリト雖而シテ毫モ之ニ伐ル所ナシ」ト其萬物ヲ生成長育スルノ靈妙ノ力アルヨリシテ天地根、天下母、衆妙之門トイヒ其無形ニシテ神ナルヨリシテ谷神トイヒ

其恍惚窈冥形容スヘカラサルヨリ玄牝又ハ玄之又玄ト云

孔德之容、惟道是從、

其恍惚窈冥形容スヘカラサルヨリ玄牝又ハ玄之又玄ト云フ其稱異リト雖均クコノ道ヲサスナリ

蓋シ老子ノ所謂道トハ易ノ太極莊子ノ直宰列子ノ疑獨釋迦ノ眞如スペンセル氏ノ不可思議ト同一物ニシテ朱子ノ所謂未有天地之先、畢竟先有此理、當初元無一物、只是有此理而已モ亦此說ヨリ變化シタルモノナリ

泰西哲學家分ツテ二トナス一ヲ一元論者トナシ一ヲ二元論者トナス蓋シ宇宙間萬般ノ事々物々千差萬別一ナラスト雖之ヲ大別スレハ物心ノ二大元素アルノミ而メ此二大元素各其實体アリト定ムルハ二元論ニメ其体一ナリト立ツルハ一元論ナリ而シテ一元論亦數派ニ分ル物ヲ以テ實体トナスモノアリ(即唯物論)心ヲ以テ實体トナスモノアリ(即唯心論)非物非心ヲ以テ實体トナスモノアリ(即理想論)古者其說分裂シテ議論未タ一定セス老子ハスナハチ一元論者ニシテ其所說唯心論ニモアラス唯物論ニモアラス稍夫ノ非物非心論ノ說ク所ト相似タリ但其內包ノ性質ニ至リテハ大ニ異ル所アリ

老子又曰ク

孔德之容、惟道是從、

執古之道、以御今之有、

人法地、地法天、天法道、

天得一以清、地得一以寧、神得一以靈、谷得一以盈、萬物得一、以爲天下貞注一者道也

聖人抱一爲天下式、

道常無爲、而無不爲、侯王能守、萬物將自化、

ト此等ノ言ニヨリテ之ヲ考フレハ老子ノ意蓋シ以爲宇宙間ノ萬物ハ皆道ニ法リテ行ハサルヘカラス而シテ人類モ亦萬物中ノ一ナレハ其國ヲ治ルムモ身ヲ脩ムルモ皆道ニ法ルヘシ」ト

以上老子ノ道即天理(一切萬有ノ本元)ニ就キテ其大略ヲ論述セリ以下將ニ人道(人類ノ經歷スヘキ道路)ニ就キテ略陳スル所アラントス前ニモ述ヘタリシカ如ク人道分ツテ治國脩身ノ二者トナセハ先ツ治國ヨリ論センニ其言ニ曰ク

天下神器不可爲也、爲者敗之、執者失之、

其政悶々、其民醇々、其政察々、其民缺々、

聖人處無爲之事、行不言之教、萬物作焉而不辭、生而不有、爲而不恃、有功而不居、夫唯弗居、是以不去、不尙賢、使民不爭、不貴難得之貨、使民不爲盜、不見可欲、使心不亂、是以聖人之治、虛其心、實其腹、弱其志强其骨、常使民無知無欲、使夫知者不敢爲也、爲無爲則無不爲、

天地不仁、以萬物爲芻狗、聖人不仁、以百姓爲芻狗、國之利器、不可以示人、

愛民治國能無知乎

天下多忌諱、而民彌貧、人多利器、國家滋昏、民多技能、奇物滋起、法令滋彰、盜賊多有、聖人云、我無爲而民自化、我好靜而民自正、我無事而民自富、我無欲而民自樸、

治大國、若烹小鮮、

絕聖棄智、民利百倍、絕仁棄義、民復孝慈、絕巧棄利、盜賊無有、

古之善爲道者、非以明民、將以愚之、民之難治、以其智多、

大道廢有仁義慧智出有大僞、六親不和、有孝慈、國家昏亂、有忠臣、

以上ノ言ニヨリテ之ヲ考フレハ老子盖シ以爲「今天下ノ紛亂シテ太平無事ナラサル所以ノ者ハ上ノ人禮義法制ヲ設ケテ賢ヲ尙ヒ能ヲ使ヒ察々ノ政ヲナスニヨルノミ是レ政治ヲナス道ニアラサルナリ大凡政治ヲナスニハ道即天理ニ法リテ作爲スルヿナキニアリ故ニ聖ヲ棄テ智ヲ絕チ仁ヲ棄テ義ヲ絕チ利器ヲ去リ技巧ヲ廢シ賢ヲ尙ハス貨ヲ貴ハス人民ヲシテ無知無欲ナラシムヘシ此ノ如クナレハ人民諄樸ニシテ自ラ化シ國家殷富盜賊アルヿナク天下無爲ニ治ル太古ノ時ノ如ケン」ト要スルニ其ノ意周ノ世ニ行ハレタル道德法制ヲ有害無益ナリトシ悉ク之ヲ破壞シ人民ノ自然ニ任シ敢テ上ヨリ之ヲ干涉スルヿナク以テ太古ノ無爲ニ復セントスルニアリ今按スルニ泰西社會學者ノ論セシカ如ク社會ハ歲月ヲ逐フテ野蠻ヨリ文明ニ進ミ下等ヨリ高等ニ登ルモノナレハ其事物モ單純ヨリ複雜ニ趣クモノタリ是レ萬世動カスヘカラサル定理ニシテ孔子ノ周監二代、郁々乎文哉、吾從周トイヒシモ亦此理ヲ述ヘタルモノナリ社會ノ事物ハ單純ヨリ複雜ニ趣クモノト

スレハ焉ゾ已ニ複雜ニ趣キタル事物ヲ復シテ單純トナスヲ得ンヤコレ最モ見易キノ事實ナリ周ノ時生民ノ初ヲ去ルヿ已ニ遠ク已ニ久シ社會ノ事物亦複雜ニ趣ケリ而シテ老子ハ即チ之ヲ太古ノ單純ニ復サント欲スコレ實ニ行フヘカラサルノ事ニシテ社會進化ノ理ヲ知ラサルモノナリ

老子又曰ク

小國寡民、使有什佰之器、而不用、使民重死而不遠徙、雖有舟輿、無所乘之、雖有甲兵、無所陳之、使民復結繩而用之、甘其食、美其服、安其居、樂其俗、隣國相望、雞犬之聲相聞、民至老死不相往來、

トコレ老子ノ以テ太平至治トナス所ナリコノコト實ニ行フヘカラサレ𪜈今暫ク一歩ヲ讓リテ之ヲ行フヘシトセンニ社會ハ一定シテ進マス焉ソ他ノ文明ナルヲ望マンヤ韓非子曰ク上古之世、人民少而禽獸多、人民不勝禽獸蟲蛇、有聖人作、構木爲巢以避群害、而民悅之使王天下、號曰有巢氏、民食果蓏蜯蛤、腥臊惡臭而傷害腹胃、民多疾病、有聖人作、鑽燧取火、以化腥臊、而民悅之、使王天下、號曰燧人氏、中古之世、天下大水、鯀禹決潰、近世之世、桀紂暴亂、而湯武征伐、今有構木鑽燧於夏后氏之世者、必爲鯀禹笑矣、有爲決瀆於殷周之世者、必爲湯武笑矣、然則今有美堯舜湯武禹之道於當今之世者、必爲新聖笑矣、是以聖人不期修古、不法常行、論世之事、因爲之備（韓非子五篇）ト其一概ニ古聖人ノ道ヲ以テ當世ニ行フ能ハストスルハ固ヨリ論難スヘキ所ナレ𪜈其社會ハ時ヲ逐フテ變スルモノナレハ其政治モ亦之ニ從ツテ變セサルヘカラストイフハ誠ニ至當ノ言タリ抑韓非子ノ學ハ老子ヨリ一變シタルモノナリ而シテ猶此言アリ而シテ老子獨リ此ニ悟ラサルハ何ソヤ或人曰ク老子ノ時天下紛亂王侯ノ其國ヲ治ムルヤ刑罰ヲ重クシ稅斂ヲ厚クシ法令繁苛嚴刻人民塗炭ニ苦ム老子此弊ヲ見テ之ヲ矯メント欲シ此ノ如ク過激失中ノ言ヲ發シタルノミ蓋シ其本心ニアラサルナリト或ハ然ラン

又老子ノ人民ノ欲ヲ去ルト云フ說モ亦行フヘカラサルノ事ナリ何トナレハ欲トハ目ノ色ニ動キ耳ノ聲ニ動キ口腹ノ飲食ニ動キ其他四伎百体精神ノ外物ニ動クノ謂ヒニシテ人ノ生レナカラニシテ有スル所ノ天性ナリ故ニ或ハ之ヲ節スルヲ得ルモ之ヲ去ル能ハサルナリ且其道ヲ失ハサ

レハ欲アルモ何ノ害アラン曾ニ害ナキノミナラス之ナクンハ能ハサルナリ何トナレハ社會ノ開進スルモ枝術學問ノ發達スルモ皆善美ヲ欲シ高大ヲ欲スルノ欲心ヨリ出ツルニ外ナラス唯己カ欲ヲ以テ人ノ欲ヲ害スルト肉体ノ欲ヲ恣ニシテ己カ一身ヲ害フトヲ惡ムノミ老子ノ長生久視ヲ欲スルモ亦欲ナリ無爲ヲ以テ天下ヲ治メント欲スルモ亦欲ナリ己レ既ニ欲ノ範圍内ニアリテ之ヲ出ツル能ハス而シテ他人ヲシテ之ヲ去ラシメント欲ス惑ヘリトイフヘシ

按スルニ希臘ソクラチス氏ノ門下ニアンステニートイフモノアリテ貧困ナルニアラサレハ學ハ脩ムヘカラサル如ク思惟シ一囊一筇ヲ携ヘテ歩行シ粗糙ナル衣服ニアラサレハ披ラス淡泊ナル食物ニアラサレハ食ハス而シテ髯モ亦唯其長スルニ任セ敢テ之ヲ剃去シタルフナシ言語動作ニ至ルマテ皆其身体ニ適合シテ粗暴ニシテ常ニ肉体上ノ快樂ヲ忌ミ嫌ヒ嘗テ曰ク其淫逸ナラムヨリ寧ロ瘋癲ナレト以テ其心ヲ推スヘキナリ其呻吟スルノ狀犬ニ類シタルヲ以テ當時ノ人之ヲ呼ンテ犬儒トナセリ是レ世ノ所謂犬儒派ノ祖ナリ老子ノ嗜欲ヲ去リ奢侈ヲ去ルノ説ハ稍之ニ似タル所アリ

或人老子ノ干渉ヲ賤ンテ自由放任ヲ旨トスルヲ以テ大ニ之ヲ稱セリ然レ𪜈人智發達シテ一國悉ク道理ヲ知リタル後ハ他人ノ害トナラサル限リハ政府人々ノ自由ニ任スルハ固ヨリ不可ナルフナカルヘケレ𪜈人智未タ發達セスシテ蠢愚蒙昧ナル𪜈ハ干渉政治ヲ行フハ社會ヲ進歩スルノ一良法ナリ老子ノ時ハ今ヲ去ルフ二千餘年果シテ人智發達メ一國悉ク道理ヲ知リ干渉政治ヲ行フノ要ナシトナス乎余亦タ之ヲ信スル能ハサルナリ殊ニ老子ノ所謂自由放任ハ今時政治學者ノ所謂自由放任ト同シカラス即チ學術枝能ヲ棄テ人民ヲメ無知無能太古ノ原人ノ如クナラシムルニアレハ之ヲ世ニ行ヘハ其社會ノ進歩ヲ害シ人智ノ發達ヲ妨ノルモノ實ニ大ナルヘシ程子曰ク老子之言、雜權詐、秦愚黔首、其術蓋有所自（二程全書）トラピット氏モ亦曰ク秦ノ始皇ノ書ヲ焚キ儒ヲ坑ニシ以テ黔首ヲ愚ニシタルハ敢テ老子ヲ學ヒシニアラスト雖老子ノ旨ヲ得タルモノナリ（支那文明論）ト二氏ノ論シタル所稍刻ニ過キタリト雖亦一理

ナシトナサス

以上老子ノ政治上ニツキテ思想ヲ論述シタレハ以下其脩身上ノ思想ヲ論述センニ其言ニ曰ク

道者萬物之奧、善人之寶、不善人之所保、

聖人後其身而身先、

俗人昭々、我獨若昏、俗人察々、我獨悶々、

塞其光、閉其門、挫其鋭、解其紛、和其光、同其塵、是謂玄同、

聖人被褐懷玉、

善行無轍迹、

居善地、心善仁、言善信、政善治、事善能、動善時、持而盈之、不如其已、揣而鋭之、不可長保、金玉滿堂、莫之能守、富貴而驕、自遺其咎、功遂身退、天之道、

福兮禍所伏、禍兮福所倚、孰知其極、

禍莫大於不知足、咎莫大於欲得、故知足之足常足、

强梁者不得其死、吾將以爲教父、

報怨以德

ト是等ノ言ニヨリテ之ヲ考レハ老子ノ意以爲身ヲ亂離澆季ノ世ニ全ウセントヲ欲セハ亦天理ニ法ッテ行ヒ謙虛柔弱ヲ以テ其身ヲ持シ善行ヲナスモ敢テ之ヲ伐ラス常ニ人ノ後トナリテ人ノ先トナラス人我ニ怨ヲ加フモ我必ス德ヲ以テ之ニ報ヒ世ノ塵ニ同クシ世ノ垢ニ和シ內ニ美德アルモ敢テ之ヲ外ニ現ハサス時ヲ見テ動キ勢ヲ考ヘテ行ヒ妄リニ猛進シテ咎禍ニ近クヿナク已カ嗜欲ヲ去リ己カ本分ニ安スルニ在リ且世間ノ事物ヲミルニ盛ナル者ハ必ス衰ヒ福ハ轉シテ禍トナリ終始循環シテ止マス故ニ常ニ滿盈ヲ戒メ富金玉堂ニ滿チ貴、王公ノ位ニ登ルモ衰ト禍トノ未タ來ラサルニ先ッテ時ヲ見テ退クヘシト老子又曰ク

我有三寶、々而有之、一曰慈、二曰儉、三曰不敢爲天下先、

ト老子脩身ノ道ヲ說クヿ多シト雖畢竟此一語ノ外ニ出テス要スルニ老子ノ脩身論ハ之ヲ脩身論トイハンヨリハ寧ロ處世法トイフヘキナリ

今按スルニ孟子曰ク鄉愿德之賊ト蓋シ人ニ阿リテ以テ世ニ容レラルヽヲ求ムルハ固ヨリ不可ナル事ニシテ君

子ノ惡ム所ナレ𪜈敢テ我ヨリ好ンテ人ノ惡ヲ訐キ人ノ意ニ逆ヒ終ニ禍ヲ招キ咎ヲ得ルニ至ルハ亦君子ノ取ラサル所ナリ是レ太平無事ノ時ニアリテモ猶且然リトナス況ンヤ亂離澆季ノ世ニ於テオヤ老子ノ脩身論ハ固ヨリ非難スヘキ所多ク君子ノ中道ニアラスト雖身ヲ亂離澆季ノ世ニ全フセント欲セハ勢此ノ如クセサルヘカラス又其事物盛衰ノ理ヲ說クハ周易ニ說キタル所ト相合セリ或ハ老子ヲ易ヨリ出テタリトスルハ一理ナキニアラサルナリ

近來泰西ニテ物理ノ定則ニハ波動說トイフモノアリテ凡百ノ事物皆其形ヲ論スレハ波動ノ象アリトセリ彼ノ水面ノ波ノ如キハ最モ著明ナル例ニシテ一高一低一凸一凹シテ已ムコトナシ空氣ノ如キモ亦水ト同ク流動体ナレハ眼以テ之ヲ見ル能ハスト雖波動ノ象ニ至リテハ水面ノ波ト同一ナルヘシ獨リ物理ノミナラス人事モ亦此定則ニ合スルナリ近ク一身ノ例ヲ取ルモ一盛一衰ハ必ス免レサル所ニシテ一國ノ如キモ亦然リ是レ歷史上ニ徵スレハ明了ナル事實ニシテ假令其時ニ長短アルモ決シテ終始平等ニシテ毫モ波瀾ナキハアラサルヘシ老子亂離澆季ノ世ニ生レ當時ノ世態人情ヲ觀察シ是等ノ理ヲ悟リシナリ

以上老子ノ立說ノ大畧ヲ論述セリ今其孔子トノ異同ヲ比較シテ讀者ノ參考ニ供スヘシ

孔子ハ進取ノ風アリ
老子ハ退步ヲ旨トス　異

孔子ノ政治ハ干涉保護ヲ以テシ
老子ノ政治ハ自由放任ニアリ　異

孔子ハ仁ヲ施シ民ヲ愛スルヲ旨トシ
老子ハ仁ヲ棄テ民ヲ芻狗ニセントス　異

孔子ハ學ヲ勸メ智ヲ磨キ民ヲ明ニセントス
老子ハ學ヲ絕チ智ヲ棄テ民ヲ愚ニセントス　異

孔子ハ社會ノ事物ハ單純ヨリ複雜ニ趣クモノトシ
老子ハ社會複雜ニ趣キタル事物ヲ單純ニ復ヘサントス　異

孔子ハ周ノ格率ヲ保存セントシ
老子ハ周ノ格率ヲ破壞セントス　異

孔子ハ賢ヲ尙ヒ
老子ハ賢ヲ尙ハス　異

（未完）

孔子ハ死シテ名ノ稱セラレサルヲ疾ミ
老子ハ名ヲナスヲ好マス　異

孔子ハ音樂ヲ好ミ禮義ヲ尊ヘリ
老子ハ音樂ヲ却ケ禮義ヲ賤メリ　異

孔子ハ怨ニ報スルニ直ヲ以テシ
老子ハ怨ニ報スルニ德ヲ以テス　異

孔子ハ世間中ニアリテ人ニ接セントシ
老子ハ世間外ニ立チテ本心ヲ全フセントス　異

以上ハ其異レル所ナリ

孔子ハ戰ヲ好マス
老子モ戰ヲ好マス　同

孔子ハ重租ヲ非トシ
老子モ重租ヲ非トス　同

孔子ハ盈滿ヲ戒メリ
老子モ盈滿ヲ戒メリ　同

孔子ハ事物ノ衰盛循環ノ理ヲトケリ
老子モ事物ノ衰盛循環ノ理ヲトケリ　同

以上ハ其同シキ所ナリ其他二子異同ノ点少ナカラサレ𪜈今特ニ其著シキモノヲ掲クルノミ

（未完）

○

甲鐵艦と非甲鐵艦の利害（前號の續）

明治二十年十一月六日大學通俗講談會にて
工學士　三好晋六郎講演

偖余は是より甲鐵艦非甲鐵艦の利害得失を比較論述せんとするに方り論旨を簡易明了にせん爲甲鐵艦を利とする說と之れに反對する說の要畧を左に陳述すべし

甲鐵艦を非難する論者の說

第一　甲鐵艦は其現出以來著き進歩ありたりと雖も之を敵手即ち大砲の進歩せる度に比する時は遙かに遲々たる者と云ざる可らず之を要するに甲鐵板の抵抗力も到底大砲の透射力に及ずして甲鐵艦は如何に堅牢となるも之を打拔く大砲を製造するは容易なるのみ而て堅牢にせんとすれゞする程甲鐵の厚さを增加せざるを得ざる者にして其增加は取も直さず艦體の重量の增加なり元來完全なる軍艦は種々緊要なる性質を有せざる可らざる者にして速度の迅速運轉の自在の如きは殊に貴重する所の者なるに

艦體の增大增重は常に是大切なる二性質を減殺するの理由なれば俱に不利益なり故に甲鐵板の厚さは決して無限に增加すべき者よ非ず隨て甲鐵艦の堅牢の度も又明瞭に制限され居る者なれば到底巨大砲に向て全く不能透にして且功力なる軍艦は製出し能ざるなり左すれば甲鐵艦も恃むにたらず寧ろ輕快にして速度の迅速なる運轉の神速自在なる非甲鐵艦を使用するの利益なる事極めて明白なり

第二　今假に甲鐵艦は堅牢無比にして非甲鐵艦に優るとするも之を製造するの費用は實に莫大にして現時歐州諸國の海軍に於て一等甲鐵艦に排列する者の一艘の代價ハ六百萬圓を降らざるなり一國の財政固とより限あり斯る堅艦の一艘を造るも決て容易の事にあらず況んや國防上數十の艦船を必要とすれば非常の富國に非ざるよりは十分の艦數を備ふる事能わず寧ろ費用の廉なる非甲鐵艦を造り其數を充分ならしむるの得策なるに如かざるなり然るのみならず若し一艘の甲鐵艦とこれを製する費用を以て造たる數艘の非甲鐵艦と戰鬪せば勝利ハ恐く後者にあるならん

第三　甲鐵艦の製造は唯に莫大の費用を要するのみならず永年月を消費する者にして短きも三四年永きは八九年に渉る者又尠とせず故に之を計畫するの日は最も新案にして最も鋭利なる堅艦とせしも文明日新の世の中に於ては數年の年月を其構造に要する間には種々新奇妙功なる者の現出して其落成の期に至れば陳腐不完全となるを免れず然るに非甲鐵艦の製作ハ極めて速かにして且ツ甲鐵艦の如く急激の改良ハ甚だ罕なる事なれバ落成後直に無用の長物に屬するが如き患の無きも又非甲鐵艦の利益とする處なり之を要するに强鋭有功なる艦隊は甲鐵艦より組成したる者に非ずして寧ろ甲鐵艦の甲鐵の重量と其莫大なる製造費とを他に利用したる軍艦即ち運轉を自在ならしむる爲船體を縮少したる、砲丸水雷等にて船底を破傷さるゝも尙ほ沈沒を免かれん爲艦內を縱橫に區分したる、速度を高增ならしむる爲機關を强大ならしめたる加るに如何なる甲鐵堅壁も容易に打ち拔に充分なる巨砲を備有したる非甲鐵艦を以て編制したる者と云ざる可ら

ざるなり

第四　甲鐵艦の甲鐵も已に彈丸の透射を免るゝ能ざる者とせゞ甲鐵は大に不利有害なり如何と云ふに砲丸にて打拔るゝ時は甲鐵の破碎より生ずる鐵片は破裂したる彈丸の細片を俱に艦内に飛散して小彈丸となり兵士を傷くる事甚しかるべし之に反して非甲鐵艦の船壁は元來薄き鐵板に過ざれば彈丸ハ之を打拔き通過するのみなれど斯ゝる損害を惹き起すの患なし

甲鐵艦を保護する論者の說

第一　反對論者の說の如く大砲の進歩は實に著明にして往時の大砲は僅に四吋半の甲鐵を接近に置くも尙ほ打拔く事能ざりしに今日は三拾五吋の甲鐵を千嗎（ヤード）の距離にて透射する大砲を製出するゝ至りたるは事實なりと雖も之を以て直に甲鐵は無効有害なりとなすは一を知て其の二を知らざるの謗を免ざるなり實際の戰爭は陸上にて位置正しく距離正確にして且不動なる鐵板を標的となし靜心充分に覘ひを定め之を射拔くと同筆法には決して行き難く海上にては彼我の艦體は常に運轉をなし且波濤の爲動搖するのみならず砲煙波浪の爲に其の目的は遮られ加るに彼我遠近の距離も確測し難けれど熟達の砲士と雖も之を命中するは決して容易ならず又假令之を射當することあるも甲鐵面を直角に打つことは甚罕にして十の九迄は斜角なるべけれゞ砲丸の透射力は著しく減殺され射的場の經驗と同日の論に非ざることゝ左の實例に照して明白なり

千八百六十六年に伊太利墺地利兩國の艦隊がリッサに於て激烈に戰鬪せし際射的場の經驗上にては五百嗎（ヤード）の距離を隔つるも八吋の甲鐵板を透射し得る三百斤砲の彈丸が近接したる艦を被覆する四吋半の甲鐵を射拔くこと能ざりし又同戰にて伊太利の一大甲鐵艦が墺地利の旗艦フェルジナンド、マックス號の爲に撞き沈められたるは全く操舵機を保護すべき甲鐵板のなきに因れり

千八百七十九年の智利白露（ベーリュー）の海戰は世に著名なる者にして智利の全勝となりしは實に白露の軍艦ヒユアスカー號の擒にされしに外ならざるなり而てヒユアスカー號の乘込員の內艦長始め三十八名の士官水夫は打死し其三十名

ハ傷られ其餘は悉皆艦と俱に擒にせられたる如き激戰なりしにも拘らず機關室彈藥庫は微傷だも蒙むらず機關の如きハ始終一點の障なく運轉自在なりしは畢竟艦體の水邊を被覆する甲鐵帶の功力に依ざるはあし而て該甲鐵は最厚の部も尚ほ四吋を超へず最薄の處即ち艦の首尾に於ては僅に二吋半を過ざるに之を攻擊したる智利の兩艦は各口經九吋重量拾二噸のアームストロング製の大砲六門宛を備有したり又該砲ハ射的場に於ても千嗎の遠距離にある拾吋の甲鐵を打拔に充分なる透射力を有する者なり若しも該艦の操舵機が艦體水邊の如く甲鐵の保護を有したりしなば速度の抽秀なるより或は敵艦を撞き沈めたるやも知れず又假令左なくとも其擒を避逃するをハ恐く容易なりしならん然に是の不幸なる軍艦は無保護なる操舵機を砲擊されたるより艦ハ直に迴轉の自在を失ひ遂に憐憫なる歷史を遺すに至りたるは亦是非もなき次第なり

千八百八十二年英國の艦隊が埃及のアレキサンドリヤを砲擊せし際も甲鐵艦の鋭利にして其大に恃むべきを證したる事實は艦隊の一艦アレキサンドラ號は堡塞より發射したる砲丸の六十餘を受たりしにも均らず艦内は些少の損傷も蒙らず又一兵の死傷もなく唯纜に砲丸の痕を甲鐵面に遺すに過さりしなり是のアレキサンドラ號の甲鐵は其物質ハ普通の鍛鐵にして其厚さ八吋乃至十二吋を過ざれば決して之を現時の堅艦と云可らざる者にして尚ほ且斯の如し是等の類例は皆甲鐵は假令最厚ならざるも實際の戰爭には彈丸を防禦にるに甚有効なる事實を吾人ょ教示する者なり

第二　甲鐵非甲鐵兩艦相戰ふ時非甲鐵艦よりの砲丸は其艦に備る内最大なる砲（最大砲は大艦と雖も三四門を備ふるに過ずして多數の軍艦は一門多くも二門を有するに止まれり）が只僅に利き目あるのみにして他の小砲は一切無効に屬するに甲鐵艦の備る所は大小共に何れも充分の利目あり殊に近年は急射砲機械砲なる者盛ょ使用され軍艦として是を備有せざる者なきに至れり元來是種の砲の最も長所は彈丸發射の甚だ迅速なるをにして急射砲は能く狙ひ打も一分時に拾丸乃至拾貳丸を發するを得其透射力も甚だ强勢にして五百嗎の距離にて三吋の綱鐵板を

穿過するに足れり又機械砲は透射力の點に於てハ遙かに急射砲に劣ると雖も一吋以下の鐵板を打拔は三四百碼を距るも充分なり而て其發射速度の點に於ては急射砲に優ること萬々にして一分時に四百乃至五百發を打は容易なり是二砲は强堅なる甲鐵艦に向ては少も其力を逞すること能ざるも非甲鐵艦の爲には最も恐べき强敵にして若し一度非甲艦鐵か是鋭砲を以て充分に攻擊を蒙れば砲士は直ちに打殺さるべく艦體は甚しく損傷さる可ければ海水ハ其より賁入し艦は其浮力を失ひ遂に轟沈するに至るべし假令支水壁等の爲進入の水量を減少するを得幸に沈沒を免るゝも吃水の變更ハ決して免る可らず而て吃水變換せば艦は適度の釣合を失し隨て其運轉の自在、速度、復厚力等の最も緊要なる性質を失ふは自然の理にして斯く進退自在を失ひたる有樣に陷りたる處にて大砲、水雷若くは尖頭(ラム)孰れを以て攻擊さるにも逃避するの手段なく沈沒さるゝにあらざれば擒となるに外ならざるべし甲鐵艦の非甲鐵艦に優る所は一二に止まらすと雖も右の如き事理明白なる大利の存在するに於ては如何に甲鐵艦嫌ひの論者も又之を非難すること能ざるべし

第三　非甲鐵艦賛成論者の大に苦慮する甲鐵の破碎より艦内の兵士を損傷するの危害は決して甚しからず殊に粘硬堅强なる合成甲鐵を使用せば是の患は殆んど全く除去するを得べく之を彼の甲鐵に向て無効なる普通の榴彈の非甲鐵艦内に容易に破裂し兵士を惱傷するの害毒の大にして且避け難きに比すれば彼是の利害自ら判然すべし又論者は甲鐵艦の甲鐵は射的場にて如何なる砲丸をも防禦するに充分なる厚を有するを必要となし論ずればこゝ甲鐵艦は進退自在を失ふ程の巨艦ならざる可らず隨て其速度は極めて遲鈍ならざる可らず其構造も亦不完全ならざる可らざるが如く思考それど是れ實に甚き誤謬と云べし前節にも陳ずる如く實際の戰爭には決して斯の如き最厚の甲鐵獨り有功ならず最薄の者と雖も之を非甲鐵に比すれば頗る功能あり加るに甲鐵の厚さは艦體孰れの處も同一なるに及ず其厚薄は保護の必要の輕重に從ひ之を增減すべし假令は大切なる急所即ち彈藥庫機關室及操舵機の如き最も緊要なる所は其厚きを要するも他は之を薄減す

るも差支なし之を要するに論者の説の如く甲鐵の重量ハ決して非常に大なるを要せざれば緊要なる諸性質を全く犧牲にすることなく迅速なる、迴轉自在なる、構造完全なる、强堅有力なる甲鐵艦は製出し得る者なり

甲鐵艦の製造費の莫大なるハ事實なれど之を以て甲鐵艦を無用視するは甚理由なき次第と云べし如何となれば元來兵器は決て經濟なる者に非るなり唯之を必要とするが故不得止之を備ふる者なれば金錢の多少を以て直に其利害を云ふ可らざる者なり況や論者の云ふ一艘の堅艦は同價にて製造し得る脆弱なる非甲鐵艦の多數に劣るとの説は實際甚覺束なく經歷ある或る海軍將官は戰鬪上の定則として集合力は離散力より勝優なることは確實なりと云へり誠に格言と云べし

却説以上の兩説は共に極端論にして何れも其中庸を過き所謂自分勝手の論たるを免れざれば双方とも其儘に信し難しと雖も虚心平氣に彼是の利害を比較して思考せば吾輩は甲鐵は彈丸防禦には決て無効有害ならずして大に恃むべきを信ずる者なり近年甲鐵を無用視する論者往々あるにも拘らず甲鐵の使用は益多きを加るは明瞭なる事實にして昔日は純然たる甲鐵艦に非ざれば必ず單純なる非甲鐵艦なりしも今ハ大に其趣きを異にし小形の砲艦も尚ほ彈丸防禦の爲厚き鋼鐵板を被覆したる甲板を備有するに至りたるは甲鐵其の價直を失ひたるゝ非ずして却つて之れを增したるの証跡なり只た甲鐵板裝置法に變更を生じたるは事實にして昔日は縱貼外裝甲鐵を專とせしに今は之れに加るに或は換ゆるに内裝甲鐵を多用するに至りたるなり

茲に掲くる表は昨年英國に於て出版したる海軍年報に據り作りたる者にして第二表は各國所有の甲鐵艦の總數艘及甲鐵の厚さを第三表は其甲鐵艦の大小及總噸數を第四表は其非甲鐵艦の大小、總艘數及總噸數を示す者なり而て第五表は以上三表ゟ再製せし甲鐵艦と非甲鐵艦との割合を兩種艦の總艘數及總噸數に對照し顯示する者なれば各國が兩種孰を貴重多用するやは是表に就て觀ば自ら明瞭ならん元來軍艦の强弱等級を定むるハ決て簡易ならず否錯雜殆んど極め難き者なれば排水積噸數即ち艦體及載

積物の全重量を以て定むるを先づ最も至當とせり故に兩艦の多少は艘數の割合に依る可らずして噸數の割合を以て判定そべき者なり

第六表は昨年より本年に渉り建造中の英吉利其他歐州五ケ國に屬する甲鐵非甲鐵艦の艘數を示し且甲鐵艦の勢力は現今も甚た隆盛にして決て海軍より驅逐されざるを證明する者なり

余は今や此講演を終るに臨み一言を述んと欲す他にあらず我日本海軍も漸次强盛に趣くは諸君と共に祝する處なれど未だ幼稚たるを免ざれば我國財政の許す限何卒陸續と有効强力なる軍艦を增加し茲に揭示する表中に於て假令最高の地位を爭ふに至らざるも亦能其五六の地位に速に達せんことを並に是等の軍艦製造を遠く英佛其他の外國へ依賴せす悉皆是を內國に於て內國人の手を以て建造し得る丈に造船事業の進步隆盛に至らんことを余は日本帝國の爲諸君と共に熱心希望する者なり　（完）

第貳

拾三ケ國甲鐵艦

甲鐵最大厚 / 國名	20 吋以上	20 吋 / 17.5吋	17.5吋 / 15 吋	15 吋 / 12.5吋	12.5吋 / 10 吋	10 吋 / 7.5吋	7.5吋 / 4 吋	總艘數
英吉利	4	12	8	5	14	10	19	72
佛蘭西	5	7	4	7	7	12	15	57
露西亞	——	——	4	5	10	1	19	39
獨逸	——	——	4	1	4	12	4	25
和蘭	——	——	——	——	——	18	5	23
伊太利	2	8	——	——	——	2	9	21
北亞米利加合衆國	——	——	——	4	15	——	2	21
土耳其	——	——	——	——	1	4	10	15
瑞典	——	1	——	7	5	1	1	15
澳地利	——	——	——	1	1	6	4	12
巴西	——	——	——	2	2	——	8	12
日本	——	——	——	——	——	1	4	5
支那	——	——	——	2	——	2	——	4

第參 拾三箇國甲鐵艦

國名＼排水積	10000噸以上	10000噸 7500噸	7500噸 5000噸	5000噸 2500噸	2500噸 1000噸	1000噸 500噸	500噸以下	總艘數	總噸數
英吉利	12	23	22	12	3	——	——	72	500000
佛蘭西	10	8	15	15	9	——	——	57	330000
露西亞	3	6	6	11	13	——	——	39	178000
伊太利	10	——	3	7	1	——	——	21	168000
獨逸	——	3	9	1	12	——	——	25	102000
土耳其	——	1	5	4	5	——	——	15	65500
澳地利	——	——	9	3	——	——	——	12	65000
北亞米利加合衆國	——	——	1	4	15	1	——	21	51000
和蘭	——	——	1	1	16	——	5	23	38800
巴西	——	——	1	3	5	——	3	12	26500
支那	——	——	2	2	——	——	——	4	20560
瑞典	——	——	——	1	4	——	10	15	13000
日本	——	——	——	1	4	——	——	5	10900

第四 十三ヶ國非甲鐵艦

國名＼排水積	10000噸以上	10000噸 7500噸	7500噸 5000噸	5000噸 2500噸	2500噸 1000噸	1000噸 500噸	5000噸以下	總艘數	總噸數
英吉利	——	——	4	19	59	44	103	229	246000
佛蘭西	——	——	4	10	46	21	122	203	205000
露西亞	——	——	1	11	22	16	36	86	93000
北亞米利加合衆國	——	——	——	12	22	4	12	50	84000
獨逸	——	——	——	12	14	10	4	40	75000
伊太利	——	——	——	9	11	11	10	41	53700
和蘭	——	——	——	6	6	17	31	60	51000
土耳其	——	——	——	1	5	21	20	47	44700
支那	——	——	——	2	11	3	26	42	35500
澳地利	——	——	——	3	10	9	7	29	34700
日本	——	——	——	2	8	7	5	22	24000
巴西	——	——	——	——	5	6	22	33	14500
瑞典	——	——	——	——	4	10	8	22	14500

諸練習艦。水雷艇。運送艦。倉庫艦。測量艦及ビ其他港內使用艦ハ包入セズ

第五

拾三ヶ國甲鐵艦非甲鐵艦ノ比較

國名	甲鐵艦非甲鐵艦合艘數	甲鐵艦非甲鐵艦合噸數	合艘數の百ニ對		合噸數の百ニ對	
			甲鉄艦艘數	非甲鉄艦艘數	甲鉄艦噸數	非甲鉄艦噸數
英吉利	301	746000	24	76	67	33
佛蘭西	260	535000	22	78	62	38
露西亞	125	271000	31	69	62	38
伊太利	62	221700	34	66	76	24
獨逸	65	177000	38	62	58	42
亞米利加合衆國	71	135000	29	71	38	62
土耳其	62	110200	24	76	59	41
澳地利	41	99700	29	71	65	35
和蘭	83	89800	28	72	43	57
支那	46	56060	9	91	38	62
巴西	45	41500	27	73	64	36
瑞典	37	27500	41	59	47	53
日本	27	34900	19	81	31	69

第六

歐州六ヶ國ニ於テ現今(1886—7)製造中ノ甲鐵艦及非甲鐵艦

國名	甲鐵艦	非甲鐵艦	合艘數
英吉利	19	28	47
佛蘭西	10	12	22
露西亞	7	10	17
伊太利	7	9	16
獨逸	——	9	9
澳地利	2	4	6

水雷艇ハ包入セズ

雜報

○大學通俗講談會　は例年の如く第三(春)期の講談會を催ふす其日割は左の如し

三月十七日夜　菊池大麓君（數學）　丹波敬三君(藥學)
四月一日晝　山川健次郎君(物理學)　飯島魁君(動物學)
五月六日晝　櫻井錠二君（化學）　鳩山和夫君(法學)
五月十九日夜　下山順一郎君(藥學)　三浦守治君(病理學)
六月三日晝　和田維四郎君(金石學)　高松豊吉君(化學)

去る十七日は即第一回にして同夜は菊池君は平面國の話丹波君は裁判化學の功用ょ付て演說され聽衆は相變らず大勢なりし何れ例の如く講師ょ乞て其筆記を本誌に掲く可し

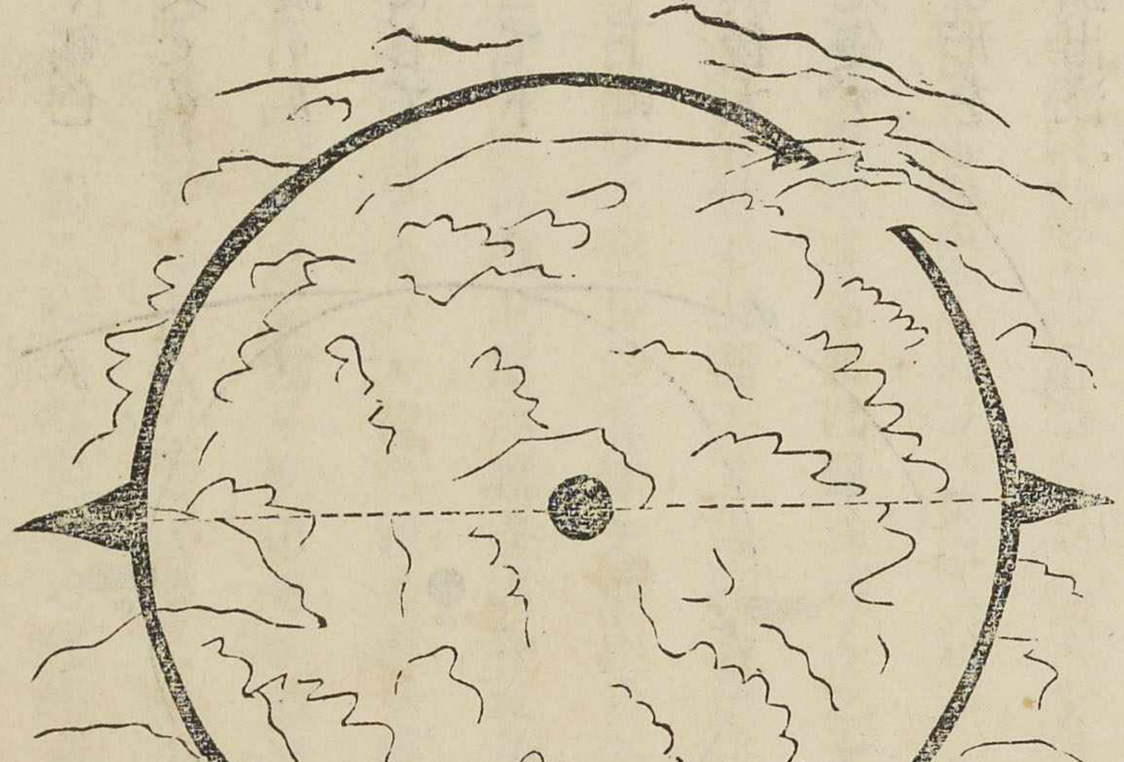
○田中正平君洋琴を改良す　理學士田中正平君は三年前文部省より專ら音響學研究の爲め獨乙國へ留學を命ぜられベルリン府に於て勉學なし居たるが近頃洋琴(ピヤノ)に大なる改良を加ふる方法を發明し同所の或る有名なる洋琴製造者の賛成を得此改良を施したる樂器を作り上げ其道の大家數名の批評を乞たるに大に好評を得目下專賣權の出願中なりと聞けり吾邦の學者にして西洋の樂器に改良を加へたるは同氏の面目のみならず吾邦の名譽なり

○佛蘭西建築家の失策　近着の「子ーチュアト」雜誌に依れば佛國の建築家は有用よりも粧飾を主とするものと見へ今度パリーに新築したる醫科の建物に於ては冬時は諸實驗場（化學、生理學、バクテリヤ學、病理學）へ全く水の來らざる樣に成り少しも研究は出來ざる由又ソルボンヌ（大學本部）に於ても粧飾丈けは落成したれ共其要用なる部分に取掛る前に金が盡き當分見合せに成る可しと云ふ若し果して右樣の事が實事ならば近頃佛國の學問は衰微の傾向なりと云ふも又敢て驚くに足らず

○古き種を持ち出す　他の雜誌に載せたる論文等を斷り取りて一冊の雜誌とし是まで著者の權を蔑視したる或る利口なる人も新條例に依り是まで切り取りの得意先としたる雜誌ハ皆版權を得たるを以て今度は據ところなく其等の雜誌に一二年前に載せたるものを持ち出して來りたるか是も長くは續くまじ其後は何如爲さるゝか定めし又人の何とがで角力を取る妙工夫を爲す事ならん

本誌第七十六号及七十七号にハロの現象に係る通信を掲げたる處其後左の通信を得たれば之を掲く斯の如き現象は理學者の參考とも成る可ければ通信有らんをを讀者諸君よ希望す又ハロの原因に付て質問も有りたるが追て記載するをある可し

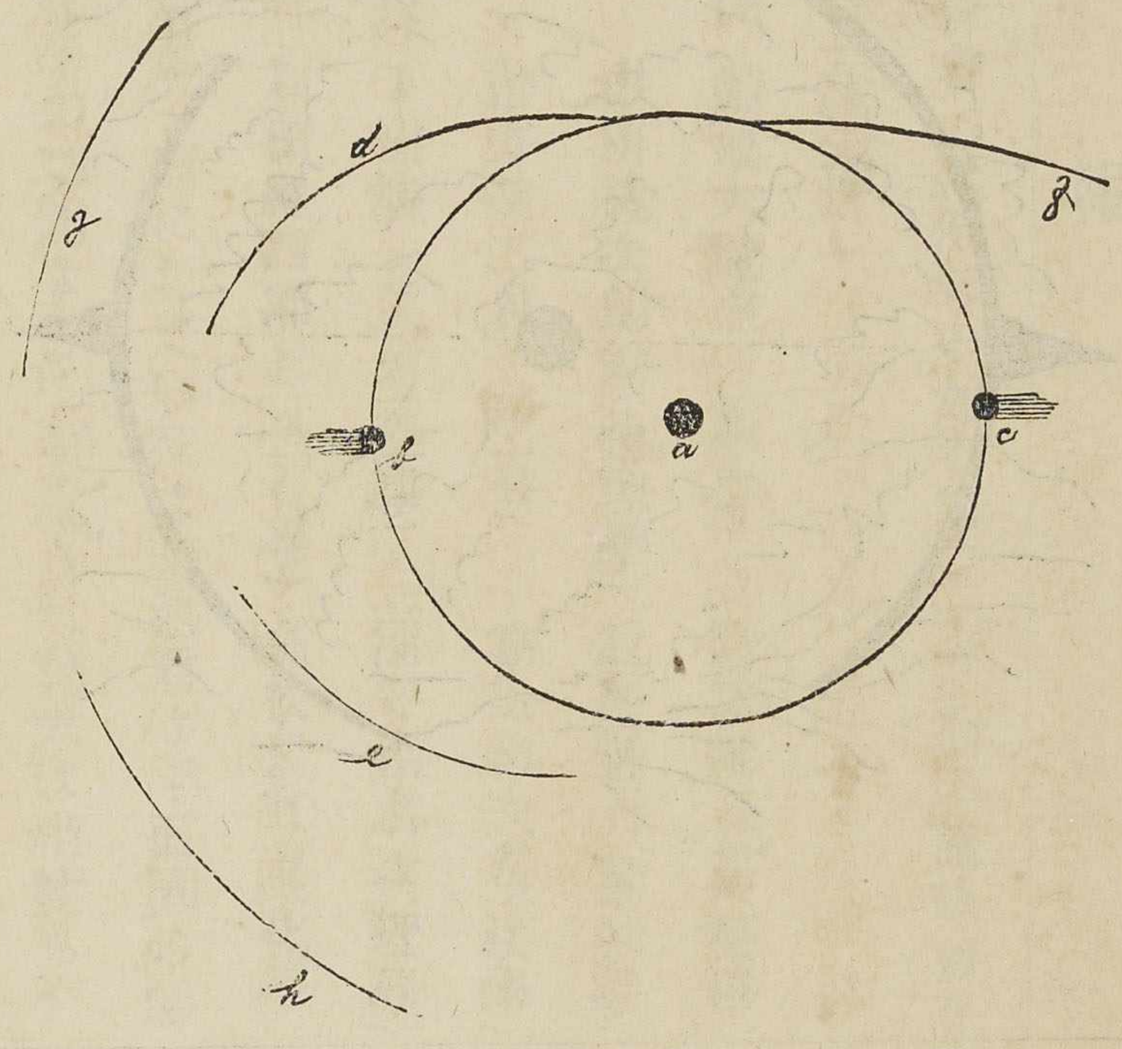
○二月六日ハロの現象　貴社雜誌第七十七号の雜報欄内に太坂大手の學校なるNMY氏の報なりとて云々と掲げてあり余も同じ日の朝本郷より一ッ橋外の高等中學校へゆかんとて水道橋を渡りし折何氣なく東の天を見上しよ虹見たるやうなる者目に入りたり此日は空一面に打曇りて殊に大陽のまはりには黑き雲立込みければ那の虹色の者も全くは見へざりしが兎に角圓周の一片にして大陽を中心となせるもの、如く大さハ通例の日暈もありぬべし是時ハはや八時近し斯くて三崎町猿樂町と路次の町々過き行く間も止まで空を眺めつ、ありしに那の彩光の環も七分許り現れたる其が中に大陽を通して引ける水平線と光環と切合ふ處に大陽に背きて走れる彩光ありて最も輝然たりかゝりける程に學校に來てはや授業も始るなれば殘惜くも見捨てぬ時のありたらむにハ尙見たる所もありつらんさて其後是現象を觀たる人ありて新紙雜誌等に出でもやすると待居りしよ絶へて其事なければ知らさぬも殘惜く思ひて貴社に投じぬ畧圖も添記しつ



第一高等中學校生徒　片山謹一郎誌

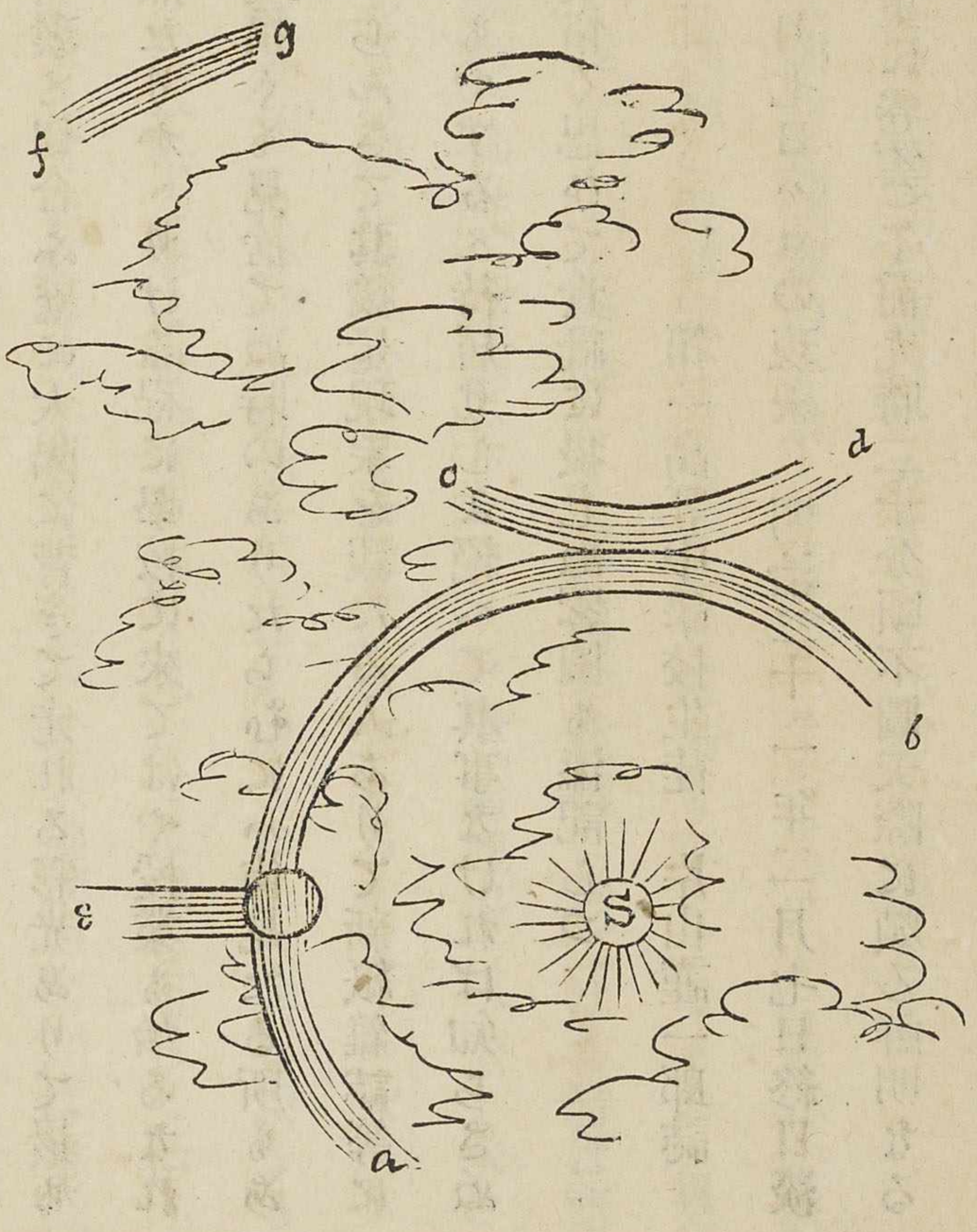
○二月七日ハロの現象　明治二十一年二月七日終日淡曇(重に卷雲)午前九時二十分頃不圖天際に頗る鮮明なるハロを見たり圖中(a)は太陽(b濃)(c淡)は幻日にし

て少しく銅色を呈し（c d f）は濃 g h い外輪にして淡し而して下部は地平下にあれり其後太陽の高度變ずるよ從ひ形を更へ隱顯出沒遂に日沒に及べり



在濱　松　T・O　生

○二月廿四日ハロの現象　記者閣下　小奴は過般本月六日小奴が實見したるハロの現象御通報申上置候處當二十四日再度同現象實見仕候斯く同じ樣なることを度々御通報申上候も徒に閣下卓上の混雜を煩すのみにて却て失禮とは存候得共小奴が親愛なる艮師に對するの報酬にもと存し斯くは申上候献芹の微如し理學上の參考とも相成候はゞ幸甚不過之候謹言



二月廿四日午前八時四十分頃天氣淡曇にて朦霧高く地平線上を鎖したりしが此時大陽の左邊に當りbなる贋日を認めたりしかば注目して之を眺め居りしに遂よabcdesの如き線微に顯れたり暫時にして漸く分明となりしかど其彩色去る六日のもの、如く虹色ならずして尋常の日曇の如くなりし又遙隔りてfgを見たり此者のみは獨り麗しく七色を顯したれど其長さ甚短くして彎曲の度を知る能はざる程なりし九時比には其光甚弱きを見たれど之より後

は余教場に入りしを以て遂に其何時に消失せしやは知る能はざりき

（此圖は前報と同じく目分量に認めしものなれば固より其位置弧度等十分精確なるものにはあらず）

明治廿一年二月廿五日夕認　大坂大手に於て N. M. Y.

○サカリン　ドクトル、ファールベルヒが嘗てコールタールよりサカリンと云へる一種の甘き化合物を製出したるをハ曩きに本誌の雜報中に記載したるが猶聞く所に據れば近頃獨乙國に於ては右のサカリンを盛んに製造し種々の需用に供する中にもパン、菓子、シャンペン、ラム子、油、藥劑等に甘味を附するには最も廣く之を用ふる由而して此サカリンは尋常の砂糖よりも三百倍余甘き物なれば僅かの分量を用ひて充分の甘味を與ふるをを得るのみならず從來藥劑等に砂糖を用ひ難き場合に於ても能く之を使用するをを得又サカリンは砂糖と異り酵毋に遇ふも醗酵を起すをなく却て之を防く性あるが故に此藥品を食物に調和すれば腐敗するをなく貯ふるをを得ると云ふ

○ホフマン氏　獨乙國の有名なる化學者アー、ヴェー、ホフマン氏は本年七十歳の高齢に達せしを以て同國の化學者諸氏は來る四月八日氏の誕生日を期して伯林府に集り祝賀會を開く由にて既に我東京化學會に於ても此意を賛成し會長長井長義氏より日本語の祝文よ獨乙語の譯文を添へてホフマン氏に送りたる由

○微粒子病肉眼鑑定法　東京農林學校教授佐々木忠二郎氏は微粒子病に就き多年研究せられ種々の好結果ある中にも是迄顯微鏡を用ひざれば全病の有無を撿定し能ハざりしを肉眼にて容易に見分け得る徴候を發見せられ該病に罹りたる病蠶を除くるをを極て容易にせられたるは我國養蠶家に取りては實に莫大なる利益と云ふべきなり同氏の研究及ひ養蠶に就き同氏の持論大畧は掲げて本誌第七十三、七十四、及び七十六号にあれば讀者は既に之を了解せらるゝならん氏近頃又微粒子病肉眼鑑定法と題せる一小冊子を著はされ簡易なる語を以て養蠶の方法を論ぜられたり近來出版物多き中にも此の如き著者自己の實驗に據り成りたる書は蓋し稀なるべし

○デ、バリー氏　ストラスブルグ大學校の有名なる植物

學教授アントン、デ、バリー氏は去る一月十九日死去したる由同氏は千八百三十二年フランクフオルトに生れベルリンに於てアレキサンドル、ブラウンの門に入りて學を修め少年かして研究の力に富み始めフライブルグ、ハレ、等の諸大學校に於て教授たりしが千八百七十二年以來ストラスブルグ大學校に於て職を奉し氏の門に出たる高弟幾人なるを知らず氏は重に隱花植物の研究を務め就中菌類(ピルツ)に就き氏の發見したる事實は彼のバクテリヤに關係したるもの多けれは衛生上、殖産上、經濟上社會に與へたる利益實ふ莫大と云ふべきなり氏の著述頗る多し中にBeitraege zur Morph. u. Phys. d. Pilze 及び Cuparative Morphology and Biology of the Fungi, Mycetozoa and Bacteria の如きは尤も廣く人に知られたるものなり又氏は千八百六十七年以後ボタニシエ、ツアイトウング植物學雜誌の編輯者として盡力したる所多しデ、バリー氏未だ老年と云ふ程にあらざるに既に長逝す實ふ生物學に取りては惜むべき人なり

○獨乙學藝雜誌の隆盛　目下獨乙に留學中なる理學士横山又次郎氏は先年日本の化石に關し長編の論文を著述せしが獨乙の學士は之を有益のものとし同國の古物學雜誌に登錄せんと申入れたりしに同社の答に弊社の雜誌に掲載すべき原稿積堆して向ふ三ケ年間に出版し能はざる程にて其編纂に困却し居れを目下の處御需に應じ難く尤三ケ年の後なれを奈何にも取計ふとのをなりとぞ獨乙は兼々學術隆盛とは聞及び居りしも斯く迄とは思はざりしと横山氏より社友の許に申越れたり成程日本にて某雜誌の如く元來無一物にして他人の編纂する雜誌より論文を盜みて成立ものとは少々違ふ樣なり

○地震動と家屋建築法取調委員會　同會は去る十五日文部省に於て集會し其砌は西斑牙文佛文にて出版の地震地方家屋建築法幷に條例を英文に飜譯して委員に配布するを地中地上の地震動多少比較、砂地、小石地、岩地に於ける地震動研究、煉瓦石、其他建築用材料強弱試驗を執行する爲め各委員を撰定せりと

○本社へ寄贈せられたる書籍雜誌

寺尾壽著算術教科書　上卷　著者

鈴木彥人譯補飲水試驗新法	譯者	
以良都女　第八號	成美社	
中外醫事新報　第百八十七號	中外醫事新報社	
交詢雜誌　第二百八十六號より第二百八十九號まで	交詢社	
鹿兒島縣私立教育會雜誌　第三號	鹿兒島縣私立教育會	
大日本教育會雜誌　第七十三號	大日本教育會	
出版月評　第七號	月評社	

雜錄

○地方ニモ亦工手學校ノ設立ヲ望ム

田舍山人

山人ハ鑛山實地學校ノ設立ヲ熱望スルモノヽ一人ナルガ此度江戸ノ眞中ニ工手學校ト云ヘル實地ノ速成學校新設ニ相成リ時節柄頗ル御盛ンノ由承リ日本ノ工業ガ將來愈々發達スベキ吉瑞ト存ジ山人モ乍蔭喜ビ居リ候偖新聞紙上ノ廣告ニ據レバ右學校ノ組織ハ官私ノ別アルニモセヨ宛然工科大學ノ支店ニシテ其旦那ヲ始メ番頭サンヨリ手代衆ニ至ル迄現ニ本店ニ勤務セラルヽ人々カ又ハ多少本店ニ關係アル人々ナルガ如シ而シテ其專門ノ賣品モ又工科ノ通リ七科目ニメ僅々一年半ヲ期シテ卒業ノヿナレバ買手ノ爲ニハ至極便利ニシテ御店ノ繁盛モ亦無理ナラヌヿト存候然ルニ茲ニ山人ガ最モ解シ難キ一点アリ即チ他ニアラズ固ト此工手學校ナルモノハ工學士ノ手足ト爲テ働クベキ實地家ヲ養成セラルヽヿナレバ其ノ教育法モ自ラ大學トハ異ナラザルヘカラズ彼ノ大學ハ高尚ナル學理ヲ教授スル處ナレバ書籍ニマレ圖畫ニマレ雛形ニマレ凡ソ理論上必須ト認ムルモノハ悉皆完備セラルヽヿト存ズレバ其支店タル工手學校ニ於テハ獨リ此等理論上ノ器具ハ大ニ本店ノ補助ヲ蒙リテ甚都合宜キノミナラズ亦府下ニハ有名ノ製造場、機械場、造船所、電氣燈會社、電信局等モアリ其他土木工事ヤ家屋ノ新築ハ陸續興ルヿ故理論實地兩ツナガラ充分ノ修業ガ出來ルト思ハレマスガ獨リ鑛山科ニ於テハ聲下廣シト雖モ何レノ場所ニ於テ其實地演習ヲサセラルヽニヤ是レ山人ガ府下ノ諸君ニ向テ高諭ヲ仰ク處ニ候聞ク歐米ノ諸國ニ於テハ鑛山ノ實地學校ハ必ズ鑛山地方ニ設クルモノナリト是レ畢竟半日ハ實地半日ハ理論ト一時ニ相方共ニ修學スルヲ得且ツ其實修中ニハ其坑夫又ハ職工同樣幾分ノ賃金ヲ得テ學資ヲ補フ等ノ便

アル故ナランカ彼ノ普國ノ首府ナル伯林ハ世ニアラユル種類ノ學校ヲ集メテ此府ニ置クヲ以テ得意トナス由ナレ𪜈流石ニベルグシユーレ(鑛山小學)丈ケハ伯林ニ於テモ看出スヿ能ハズ然ル.ニ日本帝國ノ首府ナル東京ハ諸外國ニ先テ鑛山小學ヲ府内ニ設ケタルハ實ニ古今未曾有ノ擧ニシテ十九世紀中出來事ノ一ニ數フニ足ルベシ或人嘗テ之ヲ評シテ曰ク木ニ縁テ魚ヲ索メ、疊ノ上ニ水練ヲ學ブトハ蓋シ此類ヲ云フカト然レ𪜈山人ハ斯ノ如キ評語ヲ聞クヲ好マズ私ニ評スラク皆無ヨリハ增ナリト這ハ山人ガ田舍ニテ遠察シタル考ヘナレ𪜈實際其内幕ニ立入リナバ種々ノ治理モ内情モアルヿナラン例ヘバ工科ノ支店タル以上ハ本店同樣ノ專門ヲ授ケヲバ不都合ニテ獨リ鑛山科丈ケハ其御得意ニ對シテ御合ヒ惡クサマト斷ルモ異ナモノニシテ目下工業進歩ノ矢前ニ向テソンナ愛憎ツ氣ノナキヿモ演ベラレマジ又現ニ實業ニ從事スル人ニメ理論ノミヲ學ビタシト云フニハ屈强ノ校舍ナリト思ハルヽガ果メ其職ヲ擲チ態々出京スルガ如キ奮發家ガ世ニ多クアラウカ若シ實際ニ之アラバ非常ノ篤志家ト賞スベシ又地方鑛業者ノ子弟ヲ東京ニ留學セシムルニ當テ高等小學卒業或ハコレト同等以上ノ學力ヲ有スルニモセヨ豫テ在京ノ就學一方ノ書生ト競爭シテ入學試驗ニ首尾能ク其勝ヲ制スルヿヲ得ルヤ否ヤハ豫メ期シ難キヿニテ若シ萬一落第シタル𪜈ハ奮發モ入費モ水泡ニ屬スル譯ナレバ遠國ノ人ノ内ニハ先ツ二ノ足ヲ蹈ム人モアラン兎ニ角鑛山小學ハ鑛山地方ニ便多クメ都下ニ益少キヿハ地方ノ有志者モ無論山人ト同感ナル可シ彼ノ普國ノ如キハ日本全國ニ比スレハ面積モ人口モ坑數モ較々少キ邦國ナレ𪜈既ニ三十九ケ處ノ鑛山地方ニ各一ノ鑛山小學ヲ置キ毎年千名内外ノ實地家ヲ養成スルナリ又日本ノ四國ヨリモ狹隘ナル撒遜國ニテハ金ナ山地方ニ一ヶ處炭坑地方ニ一ヶ處ノ鑛山小學ヲ設ク豈ニ盛ナル景況ナラズヤ然ルニ堂々タル日本帝國ノ鑛業家ハ單ニ都下ニ一校舍アルヲ以テ滿足セラルヽカ山人ハ決シテ其然ラザルヲ信ズルナリ然レ𪜈獨乙國ハ古來正則ノ鑛業ヲ營ミ鑛產モ豐ナルヿナレバ隨テ數多ノ工手ヲ要スル次第ナレ𪜈我國ニハ鑛山學ノ輸入日尙淺ク其學理ヲ應用シタルハ漸ク昨今ノヿナレバ今俄カニ多數ノ

校舍ヲ建設スルノ必用ヲ感ゼザル可レ𪜈目下ノ如ク工手掃底ノ有樣ニテハセメテ東北ニ一ケ處中國ニ一ケ處西國ニ一ケ處都合三ケ國ニ鑛山工手學校ノ增築ヲ希望スルナリ而シテ此三ケ處ハ鑛山ノ模範トナルベキ資格ヲ備ヘザル可ラザレバ今假リニ山人ガ此ノ三ケ處ヲ例示センニ東北ハ佐渡相川ニ之ヲ置キ金銀銅鉛鑛ニシテ雜石多キ鑛脉ヲ採收冶製スルノ方法ヲ專門トナシ中國ニハ但馬生野ニ之ヲ設ケ金銀鐵安質母尼鑛ノ外專ラ硫化鐵ニ富メル銅鑛ノ採鑛冶金法ヲ授ケ又西國ニテハ筑後ノ三池又ハ肥前ノ高島ニ於テ石炭專門ノ採鑛法ヲ教フルノ校舍ヲ設ケナバ當分山人ノ素志ヲ完フスルヲ得ベシ偖斯ク繩張シタル以上ハ如何シテ此三校ヲ新設スルヤト云フノ一点ニ於テハ山人モ甚頭痛ヲ感ズル處ナリ此度東京ニテ工手學校ヲ創立スルニ當テ其發起者ニハ世間ニ最モ顔ノ廣キ渡邊總長アリ教授及役員諸君ニハ府下屈指ノ諸先生アリ加之全國ノ工學士ハ校友ト爲テ其外東西ニ控ヘテ居リ又資本ヲ集ムルニハ豪商紳士ノ補翼ヘ學術會ノ寄附抔アリテ瞬間ニ開校ノ運ビニ至リシハ遠ガニ花ノ都丈ケアリテ山間僻邑ノ穴堀一同敬服ノ外無之地方ニ於テハ第一ニ金ノ生ル本ガ都下ノ樣ニ多ク生ヘテ居ラス第二ニハ諸先生ノ顔ガ揃ハ子バ東京ト同一ノ手段ニテハ到底同等ノ工手學校ヲ立ルハ覺束ナケレ𪜈鑛山一方ナラバ敢テ六ケ敷キコトニモアラザル可キカ先ツ山人ノ考ニテハ幸ヒ佐渡生野三池ハ何レモ官坑ノコトナレバ獨乙國ノ擘ニ倣ヒ官設ト爲シテハ如何尤モ官立ナレバトテ我々同胞ノ膏血ヲ絞リテ鑛業人ノ腹ヲ肥スガ如キ義ニハ無之右三坑ヨリ毎年收ムル處ノ純益ノ一小部分ヲ以テ之ヲ設立セラレンコトヲ希フコトナリ若シ又民間ニ有力者アリテ私設ヲ企ルモノアラバ一層妙ナル可シ例ハ長崎ノ高島炭坑ノ如キハ資力ト云ヒ學力ト云ヒ日本無双ノ鑛山ナルベシ攝州ノ多田銀山陸中ノ小坂銀山等亦之ニ亞クベシ斯ノ如クンバ地方ノ子弟モ實業家モ居ナガラニシテ就學ノ便ヲ得ルト同時ニ日本ノ鑛業ハ益々隆盛ノ域ニ達センコト期シテ待ツベシ我輩鑛業者ハ既ニ隴ヲ東京ニ得タリ何ンゾ進ンテ蜀ヲ地方ニ望マザルヤ

○

グレー氏ノ畧傳

理科大學教授　矢田部良吉

亞米利加ノ植物學者グレー氏ノ訃音ヲ聞キ我輩實ニ悲歎ニ堪ヘズ今氏ノ略傳ヲ得タレバ此ニ掲グ

Professor Asa Gray 氏ハ有名ナル植物學者ニシテ多年米國ハーヴァード大學校ノ教授ヲ奉職シ植物學ニ關スル著書多キ學士ニシテ其植物學教科書ノ如キハ我邦ニテモ亦廣ク行ハルヽモノナルガ去ル一月卅日同國カンブリッヂノ居宅ニ於テ死去シタリ氏ノ病症ハ中風ニテ餘程前ヨリ之ヲ患ヒ居リシガ一月廿五日頃ヨリ重症トナリ稍人事不省ノ容体ト變ジ遂ニ恢復セザリキグレー氏ハニウヨークノ州オヲイダ郡ノパリス邑ニ於テ千八百十年十一月十八日ニ出生シタリ氏ノ父ハ醫學ヲ修メシメンヿヲ望ミタルヲ以テ氏ハフェヤフィールド學校ニ入リ此學ヲ修メ千八百三十一年ニ卒業シタリ然レ𪜈其後間モナク醫業ヲ廢シテ專ラ植物學ニ志シタリ當時米國ニ於テ此學ヲ深ク研究スル人少キヲ遺憾トシ斯クハ志ヲ決シタリト云フサレド氏ハ幼少ノ時ヨリ森林原野ノ草木ノ事ニ意ヲ用ヒ學校ニ於テ醫學ヲ修ムルノ間モ常ニ植物學ヲ研磨シタレバ初メヨリ此學ノ大家タラント欲シタルニハ非レ𪜈遂ニ其蘊奥ヲ探知スルニ至リタリ而シテ其死スルニ方リテハ米國ハ勿論歐洲ニ於テモ方今最モ有名ナル植物學大家ノ一人ヲ失ヒタルヲ惜マザルモノナシ氏ガ醫學ヲ卒業スルノ後ドクトル、ジョン、トレト氏ト交ヲ結ビタリトレー氏ハ當時ニウヨーク府ノ醫科大學ニ於テ化學ノ教授タリグレー氏ハ千八百三十三年ヨリ四年ニ至ル冬期ハトレー教授ノ化學實驗室ニ於テ助教授タリ其年ノ夏ニハユチカニ於テ講義ヲナシ傍ラ植物學ヲ研究シタリ其後ニウヨーク府ニ於テ博物館長トナリテ四五年間ハ主トシテ植物學研究ニ從事スルヿヲ得タリ此時氏ハ米國ニ於テ最モ有名ナル彼ノ植物學教科書ヲ著シタリ千八百三十五年頃ニ合衆國政府ヨリ南太平洋事物穿鑿ノ爲メニ派出スベキ船艦ニ植物學士トシテ乘込ムヿニナリシモ其發航期限ノ非常ニ遷延シタルヲ以テ之ヲ辭シタリ氏ガ北米植物書著述ノ爲メニ其豫備ヲナシタルハ即チ此頃ナリ其後數年間北米東部及ビ西印度ノ植物ヲ研究シ遂ニ歐洲ニ行テ英佛ノ植物學家ト交ヲ結ビ千八百三十九年ノ秋ニ歸國シタリ千八百四十年ニ

至リ北米植物書第一册ノ末部ヲ著シ翌年ノ春ニ至リ第二册ノ初部ヲ著シ後一年ニシテ其末部ヲ著シタリ千八百四十二年ノ四月ニハーヴァード大學ニ於テ博物學教授ノ任ヲ受ケタリ氏ガハーヴァード大學ヘ移リシトキハニウヨークニ於テ新シキ植物教科書ヲ出版スルノ最中ニシテ同年中ニ之ヲ世ニ公ケニシタリ此書ハ前ニ著シタルモノヨリ更ニ完全ナルモノニシテ既ニ第六版ヲ發兌スルニ至レリ而シテ各版皆殆ド全ク書キ改メテ學術ノ進歩ニ後レザルヿヲ勉メタリ其他學術上ノ著述多クシテ之ガ爲メニ合衆國ニ於テ植物學ノ進歩ニ大ナル便益ヲ與ヘタリ又千八百四十六年ニ "Chloris Boreali-Americana" ヲ著シ後三年ニシテ "Genera Floræ Americæ Boreali Orientalis Illustrata" ヲ著シ千八百五十四年ニハ "Botany of the Wilkes Exploring Expedition" ヲ著シタリ就中此書ハ大ニ名聲ヲ博シタリ氏ガ著シタルダルウヰン論等ニ關スル論説ハ集メテ一册トシ "Darwinism" ノ名稱ヲ付シテ千八百六十七年ニ出版シタリ氏ハ千八百七十二年ニ至リ大學ニ於テ日々ノ授業ヲ免ゼラレテ唯大學ノ植物標本集ト氏ガ大學ニ献納シタル植物學圖書集トヲ監督シ其餘暇ヲ以テ三十年前ニ中止シタル北米植物書ノ著述ニ再ビ從事シタリ氏ハ英國ノロトヤル、ソサエチー及佛國ノインスチチュートノ外國會員ニシテ亞米利加學術會(American Academy of Arts and Science)ノ會長タリシヿアリ又亞米利加學術奬勵會(American Association for the Advancement of Science)ノ會長タリシヿアリ昨年ニ至リセント、ゴーデンスガ作リタル氏ノ肖像ハハーヴァード大學ニ献納サレタリ

批評

○鈴木彦人譯補飲水試驗新法

櫻井錠二批評

此書は其例言にも云へる如くワンクリン氏の原著 Water Analysis を譯せしものにして加ふるに獨乙法即ちクーベル及びチトマン氏の方法より其要點を抄譯し且つ終りに於てクルークシヤンク氏著の Bacteriology 即ち黴菌學よ

り拔粹して飲水試驗に必要の榮養液の製法、バクテリヤ培養法等を記載せり

衛生學上飲水試驗の必要なるとは今更言ふまでもなきことなるが我邦の如き毎年夏期に際して惡病流行するの地に在ては殊更よ飲水乃性質如何よ注目し當局者は宜く其漫延を防禦するを務めざるべからず然り而して飲水の善惡に就き充分なる考察を下すには只々化學的の試驗のみに依らずして黴菌學上の試驗をも併せ行ふを要す是れ蓋し此書の終りに於て該試驗に係る要件を附記せる所以にして余の最も賛成を表する所なり

余此書を一讀したるに其譯甚だ宜きを得非難すべきを一もなきを信ずるなり只左の一小事につき譯者の注意を引かんと欲するのみ

十一丁に固形物の全量を秤定するよ水を白金皿中に蒸發せしめ充分乾きたる後白金皿を「鐵片或は磁板上に接觸せしめ冷却せるむるを數分時間にして秤量すべし」云々と記載せしが水を蒸發して得たる鹽類中には隨分吸水質のものあり又格別吸水質のものにあらざるとも數分時間通常の空氣中に放置するときは凡ての物体は幾分か空氣中の水分を吸收するものなれば右の如く得たる秤量は眞に乾燥物の重量にあらずして幾分か水分を含有したるものと知るべし故に白金皿を單に鐵片或は磁板の上にて冷却せしめず乾燥器（デッシケートル）中に冷却せしむるの必要あり是れは譯者も充分承知のをなれ共原書のまゝを譯したるを以て之を省きたりとの事ならむ併し別に面倒なるをにもあらず且つ甚だ必要なる點なれゞ序を以て譯補者の注意を乞はんと欲す

社告

本誌ハ　七十六號を以て第五卷の始とし此より十二冊即一ケ年を以て一卷を成すものとせり

本誌は第七十六號ゟ內務大臣の許可を得て出版條例に依るものとなり且版權を得たり因て今後益諸先生の貴重なる論說記事を掲載す可し

本誌は三十二「ページ」を以て一號と爲ゝの定めなりしも近來貴重の材料頗る多く一昨年の始比よりは毎號四十ペ

ージ以上にして特に七十四號七十五號の如きは五十二三ページとなり之に加ふるに美麗なる銅版石版等有り然れ共定價ハ少しも增加せず唯紙數の增したる爲に郵便稅壹錢の所二錢となりたり故に地方の愛讀者には自然代價の增したる姿なりしが今度左の如く改正したれば陸續御注文有る可し

本誌一冊定價　拾錢
六冊前金（郵送稅共）　六拾錢
十二冊前金（郵送稅共）　壹圓二十錢

又本誌賣高追々增加し現今の處にても一萬人以上の讀者（重に教員生徒）有る計算なれば公告料左の通り改正す

五号文字一行（二十五字詰）　十錢
半「ページ」以上　二割引

東洋學藝雜誌第七十六號

明治二十一年一月二十六日發兌

目錄

論說

○學校德育論再質加藤君　東京農林學校教諭法科大學教授　杉浦重剛
○微粒子病肉眼鑑定法（前々号ノ續）　佐々木忠二郎
○著述者ノ權　木下廣次

○病氣ノ話　醫科大學教授　三宅秀
○硫黃島　第一高等學校教諭　中松原新之助
○研究ノ話　工科大學教授　中澤岩太

雜報

○ニュトン祭○田中館愛橘君○學士會○大學通俗講談會○一月二日の夜ハロの現象○グルーコス或は葡萄糖の合成○東京化學會○ブロックサム氏○地震動と家屋建築法取調委員會○酸素の工業○安全ランプ○本社へ寄贈されたる書籍雜誌

應問

○球丸電光ノ疑問ニ答フ　村岡範爲馳
○墮体速度ノ疑問ニ答フ　村岡範爲馳
○土壤分析法ノ質問ニ答フ　渡邊朔

社告

東洋學藝雜誌第七十七號

明治二十一年二月廿五日發兌

目錄

論說

○疾病の原因（圖入）　醫科大學教授　佐々木政吉
○講義用空氣の成分檢定器（圖入）　第一高等中學校教諭　久原躬弦
○硫黃島の記事（圖入）　理科大學助教授　菊池安

○日本食物要論　東京農林學校　森要太郎
○現今虎列刺病原說（圖入）　醫科大學教授　緒方正規
○葡萄糖の合成　理科大學教授　櫻井錠二
○甲鐵艦非甲鐵艦利害　工科大學教授　三好晋六郎

雜報

○バルフォアー、スチュワルト先生死す○東京數學物理學會と伊能忠敬君の碑○一月廿九日のハロ現象（圖入）○二月六日のハロ（圖入）○美術家の注意○帝國大學○石川千代松君○幾何學教課書○英國人エチプライヤル氏○本社へ寄贈せられたる雜誌書籍

雜錄

○賴三樹江刺八景の詩　青萍逸人
○伯耆の方言　宮脇郁O.M.
○僞寒暖計　龜齡道人

應問

○初涙　理科大學教授　小藤文次郎
○衛生と地水

批評

○木醋製造法（圖入）　工科大學教授　高松豊吉

批評

○東京數學物理學會記事卷三第三
○實吉理學士著平算教科書
○海野力太郎著罫線學

廣告

植物學雜誌

第十三號明治廿一年三月十日發兌一冊十二錢
郵税一錢六冊前金郵税共金七十二錢

目次○ゆのみねしだ新稱（圖入）田代安定君○やまのいも屬（Dioscorea）ニ就テ述ブ牧野富太郎君○植物病理學理學士白井光太郎君○はしりどころトベラドンナノ區別（前號ノ續）理科大學助教授大久保三郎君○「コルク」其製造及性質（前號ノ續）（圖入）理學士拓植千嘉衛君譯○冬蟲夏草ノ辨三好學君○植物の變形田中延次郎君●雜錄○植物生理學學バサルベカラズ○木ノ高ヲ測ル一法（圖入）○水藻ノ水ニ及ホス作用○石灰水ヲ灌注シテ有害菌ヲ除ク○虎列刺バクテリアノ化學上ノ反應○燐光ヲ發スル菌○「ドクトル」アサグレー氏沒ス

發行所　東京神田區裏神保町一番地　**東京植物學會編輯所**
賣捌所　日本橋通三丸善書店　神田裏神保町敬業社

○尋常小學讀本卷五　一冊定價金九錢五厘
右發行ス　明治二十一年二月　文部省編輯局

○尋常小學讀本卷六　一冊定價金九錢五厘
右發行ス　明治二十一年三月　文部省編輯局

○日本文明史略卷四　一冊定價金貳拾四錢
右發行ス　廿一年二月　文部省編輯局